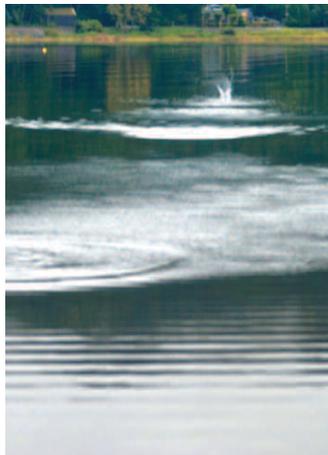


水にかかわる生活意識調査13年

水の文化 触発の 波及



諸富 徹「危機感の値段」
池内 恵「生活文化に根差した水意識」
川路直彦「節水意識を実現した水研究」
泉 麻人「みずみずしいと感じる有名人」
編集部「なぜ名古屋の水はおいしいのか」
島谷幸宏「変化する川、自由な川が美しい」
陣内秀信「身近な都市の水辺に夕暮れ文化を」
水の文化楽習実践取材「海からのラブレター」
鳥越皓之「愛でる楽しむ華やぐ」
古賀邦雄 水の文化書誌「水と暮らしの変遷」

水の文化 October 2007 No. **27**

触発の波及 水にかかわる生活意識調査13年

13年間の「水にかかわる生活意識調査」は私たちに新たなテーマをもたらしました。普段、何気なく使っている水に対しても時代によって変わる意識と変わらない意識があることが調査結果から浮かび上がってきたからです。

それらのテーマをもっと掘り下げるために気になった結果を
研究分野や立場の異なる方々に見てもらい、お話をうかがうことにしました。

調査結果の背後にあるものを、掘り起してみたら自分と違う視点や価値観に触発されるかもしれません。先入観から「当たり前」と思っていることに疑問を投げかけ見えなかったことが見えてくるかもしれません。

水の文化センターは、これからの時代に向けて「こんな見方をしたら、こんな新しい可能性も生まれるんじゃないかな」と提案できる存在でありたいと思っています。そうした触発が、人から人へと連鎖反応を起こして波及していったら面白いなあ、と考えています。

水の文化 27号 2007年10月

特集「触発の波及」

暮らしの中の水とのつきあい方と心を探った
水にかかわる生活意識調査13年
編集部

温暖化と生活意識
危機感の値段
諸富徹

アラブと日本で「水の文化」はどう違うのか
生活文化に根差した水意識
池内恵

エコと快適を満たす水洗トイレ最新事情
節水意識を実現した水研究
川路直彦

みずだより みずみずしいと感じる有名人
泉麻人

なぜ名古屋の水はおいしいのか
ご当地水道水、飲み比べ
編集部

真の清流は、地域の文化や風景があつてこそ
変化する川、自由な川が美しい
島谷幸宏

大東京、水辺空間の変遷
身近な都市の水辺に夕暮れ文化を
陣内秀信

〈牡蛎の森を慕う会〉20周年に向けて
水の文化学習実践取材 海からのラブレター
編集部

水に対する恐れや礼節を越える遊びの文化
愛でる楽しむ華やぐ
鳥越皓之

水の文化書誌 水と暮らしの変遷
古賀邦雄

文化をつくる 触発の波及
編集部

インフォメーション
51

50

48

42

36

32

26

20

18

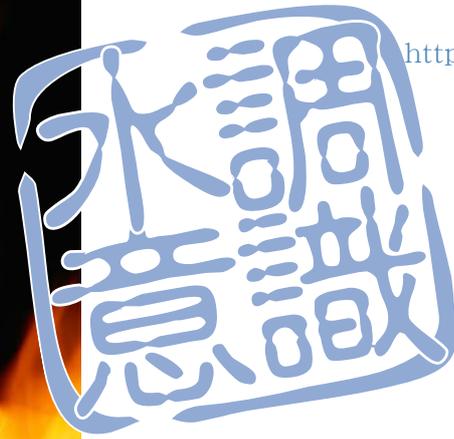
16

13

10

4

暮らしの中の
水とのつきあい方と
心を探った



水にかかわる 生活意識調査13年

1995年(平成7)に、ミツカン水の文化センターが「水にかかわる生活意識調査」を始めて13年が経った。東京圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)、大阪圏(大阪府、京都府、兵庫県、中京圏(愛知、三重、岐阜))に住む20歳から69歳までの男女計700人を対象に、年1回行なっているアンケート調査だ。当センターの活動開始に先駆けて、今まであまり注目されることがなかった「日常生活における水とのかかわり」について、改めて調べてみようと考えたのがきっかけだ。

三大都市圏の居住者を対象としているが、日本全国各地に行っても都市型のライフスタイルが浸透し、上下水道の普及率も上がっていることを考えると、このアンケートから得られる回答は、ほぼ「今の日本の水意識」を表しているといっていだろう。

果に水への深層心理を見出したりできるのではないかと考えた。質問項目の中にも、変わったものの変わらないものがある。それは世相と連動させて旬な項目を提示しよう考えてきたこと、また当センターが新しい視点を見つけたこととも関係がある。

今号では、アンケート結果の変化を比較して、それらをもとにさまざまな立場の方にコメントをいただこうと思う。いろいろな角度から物事を見ることで、自分と違った視点が発見できたら面白い。

まずは、本論に入る前の準備体操として「水にかかわる生活意識調査」13年ダイジェストから始めよう。

地球の将来は 20歳代男性が握っている

「地球温暖化をストップさせるために、いくらまでなら払いますか?」というのは、2007年から新たに加わった質問。金額を書

いてももらったところ、その平均額は約2048円という想像以上の高額になった。

さて、詳細な集計データを見ていくと1万円以上と答えた人が5・9%もいる。その多くは、20歳代男性。金銭感覚の問題もあるだろうから、手放しで喜べないか

もしれないが、地球温暖化への関心が高いことの表れと読むことはできる。

逆に0円と答えた人の割合も5・9%で、これも20歳代男性が最多。地球環境の将来は、どうやら20歳代男性の肩にかかっているようだ。



「おいしくない」は減った

私たちの暮らしの中で、大切な存在である水道水。その水道水に関する質問は、1995年開始当初から続けられている。

水道水につけられた10点満点の点数は、5・7点から7・1点に大幅アップ。開始当初は5・0点という最低得点だった大阪圏は、2007年には7・1点をマークし、7・5点をつけた中京圏に迫る勢いだ。同時に、水道水への不満のトップだった「おいしくない」という評価も、ぐっと減った。

ところが、飲料水にミネラルウォーターを選ぶという人は、8・9%（2002年）から13・8%（2007年）とわずかながら増え続けているし、飲用に使う水は浄水器を通した水とミネラルウォーターを合わせると58・9%にも上る（2007年）。

「おいしくない、という不満は減った。でも水道水をそのままでは飲まない」という理由は、なんだろう。もしかすると、塩素投入が増えたことなど、安全面への不安があるのかもしれない。そうであれば、私たちは命を支える水に「安全」と「安心」を求めている

ことになる。

ところが、おいしいと思う水のトップは断然「溪流の水」で、ミネラルウォーターを大きく引き離し、4割強の人から常に支持を受けている。

溪流の水は、もしかすると大腸菌で汚染されているかもしれないし、上流にゴルフ場があるかもしれない。「安全」と「安心」からいったら、生産管理の態勢が整っていないポトル詰めされたミネラルウォーターのほうがポイントが高いはずなのに、実際には溪流に軍配が上がる。人が水に求めるものは、奥深くて見えにくい。



排水の行方には無頓着

節水に対する意識は、調査を始めた当初から高かったが、近年の環境意識の高まりにつれて、いっそう向上し、69・6%に達している（2007年）。すでに個人の努力範囲を越え、洗濯機などの家電製品や水洗トイレの洗浄水など、

家庭用品を供給する各メーカーは節水に対して真剣に取り組んでいる。節水は、もはや単なる謳い文句の域を越え、日常的で当たり前の行為に達した感がある。

水を有難いと感じ、大切に使う気持ちは、とても尊いものだ。

反面、使った水がどこに行くのか「排水先を知っている」と答えた人の割合が38・1%（1995

年）から23・9%と（2007年）大きくダウンしているのは気がかりな数字である。

私たちはつい上水道の質ばかりを気にしがちだが、健全な水循環にとって、水の供給と排水をセットで考えることは欠かせない視点である。

排水の行方にも、もっと関心を持っていききたいものだ。



よい子は川で遊ばない？

水と親しんだ経験の有無はどう変化しているのだろうか。

「プール以外で泳いだことがある」と答えた人の合計は76・1%（2007年）。

「思い出の水辺の遊びをどこでしたか」という質問には、20歳代、30歳代では海のほうが川よりも多いのに対し、50歳以上ではそれが

逆転する。つまり、50歳以上は海水浴より川遊びのほうが多かった世代ということだ。

また50歳以上の人に、「その遊びをいつごろしましたか？」と聞いたところ、10・11歳という答えが男女ともに圧倒的に多かった。

10歳だった時点を見ると、50歳の人で1967年、70歳の人で1948年だ。四大公害病であるイタイイタイ病が1955年、水俣病が1956年、第二水俣病が

1965年、四日市ぜんそくが1960年に確認されたことを考えると、敗戦の年に生まれた今年62歳の人たちが、川で泳いだ最後の世代ではないかと推測できる。

「よい子は川で遊ばない」という看板が立てられた川を見かけることすらある現在、その世代の人たちが経験した楽しい川遊びは、はるか遠い昔話になってしまった。

きれいな川が復活したら、子供たちは川に返ってくるのだろうか。

ビール党の日本酒びいき

「水とかかわりの深い日本文化といえど」という問いに、56・9%の人が「酒造り」と答えている。酒場で銘酒を楽しむのは飲んべえには堪らぬひとときだが、実は三大都市圏では日本酒党よりビール・発泡酒党のほうが多い。

日本酒の製成量は1995年（平成7）の98万ℓから2005年（平成17）には49万9000ℓとほぼ半減している。

一方ビールも679万7000ℓから365万ℓでやはりほぼ半減。ところが発泡酒とビール風味

の第3のビール（統計では雑酒に分類）は、21万1462ℓから273万6969ℓへと大幅な伸びを見せている（国税庁『酒のしおり』2007）。味より価格、というのが最近の飲んべえのフトコロ事情なのだ。日本酒の1人あたり年間消費量第2位の秋田県でさえ、若者の日本酒離れが進んでいるという調査結果もある（秋田銀行秋田経済研究所）。

日本酒や焼酎には土地に縁のある地域密着型の酒蔵が、それぞれ無数に存在する。それぞれの味の差を楽しむことが、日本酒文化を愛でることもあるのだ。

一方ビールの場合は、大手4社

体制のまま推移し、地ビールが解禁された1994年（平成6）以降は、地ビール工場が各地にこぞって設立された。一時のブームは沈静化したとはいえ、現在、日本地ビール協会に登録されている銘柄は全国で262に達している。

また「水とかかわりの深い日本文化といえど？」の次点には、「稲作」と回答した人が48・8%に上る。これも2007年現在、日本の農業従事者は100人に5人と低いにもかかわらず、高い支持を集めている。たとえ日頃の生活から遠くなっても、「酒造り」と「稲作」には、日本の水文化を感じさせる何かがあるようだ。



台風、水不足、雨による浸水が不安に感じる 水の災害のワースト3

水には暮らしか命を支え、作物を育ててくれる正の側面と、災害という負の側面がある。

水を効率よく利用するという正の側面が、上下水道などのインフラ整備が進められてきたのと同様に、人の命や財産を守るために災害への対策も積極的に行なわれて

きた。

その結果、自分の身に水の災害が降りかかる可能性は低くなったと認識されるようになっていった。その安全神話を崩したのが1995年（平成7）1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災である。

不安に感じる水の災害は台風が67・8%、水不足57・8%、雨による浸水47・4%（すべて2007年）の順だが、地震は上下水道の断絶という思わぬ形で、被災者

に深刻な水不足をもたらした。

電動ポンプと給配水管に頼る上下水道の脆弱さが、「渇水でないのに水不足」という想定外の結果を露呈することになった。

「水不足の不安を感じている」という回答は、63・4%（2004年）から57・8%（2007年）へとわずかながら減少している。同じ失敗を繰り返さないためにも、災害に強い都市をつくるための対策を、今、講じる必要があるだろう。

身近な川より生物多様性が 里川の条件

当センターが、2003年10月発行の『水の文化15号 里川の構想』で、「里川」という言葉と概念を提唱してから丸4年。2006年には『里川の可能性 利水・治水・守水を共有する』（新曜社）を出版した。

里川のイメージで一番に挙げられているのは、清らかな水が流れる川で57・8%。2位も、生き物がたくさん棲んでいる川で53・3%。3位にやっと、身近に感じ

られる川36・1%が登場する。

我々が提言している里川は、地域密着型の身近な川のだが、残念ながらまだまだその概念は一般には浸透していないようだ。

実際に里川と思う川の名前を書いてもらったところ、四万十川が断然トップで10・4%、木曾川5・9%、多摩川5・0%と続くことから身近な川という概念とは遠い。「プール以外で泳いだことがある」と答えた人の合計は76・1%だが、自分の子供や孫の代になると28・4%（すべて2007年）と激減してしまうように、今の日本の川はどうやら身近に親

しむ存在にはなっていない。

もちろん、清流であることも、生物多様性が確保されていることも大切だが、水辺で夕暮れを楽しむために、川がもっと身近な存在になることが不可欠だ。

しかしそんな思いに反して、「水辺では夕陽が沈む様子を眺めたい」という人が57・0%（1995年）から42・4%（2007年）に減り、「景観を楽しみたい」、「散歩を楽しみたい」という人も軒並み16%以上減少している結果には救いものを感じる。

忙しいのが原因なのだろうか。ちょっと心配な状態である。

13年間の水にかかわる 主な出来事

水・環境

国際会議

その他

気象

地震・噴火

事件・事故

編集部調べ

「水の郷百選」Ⅱ国土交通省
水を活かしたまちづくりに優れた成果を上げている107地帯を認定
長良川河口堰本格運用開始
Ⅲ三重県桑名市
「人と湖沼の調和」持続可能な湖沼と取水池の利用をめざしてメデアで観察に取り上げられた。

IPCC
第2次評価報告書
第6回世界湖沼会議Ⅱ茨城県

容器包装リサイクル法成立
ペットボトルなどの再利用化が義務づけられた。
食糧法の施行
食糧制度が廃止され米販売が自由化された。
阪神・淡路大震災時、インターネットの掲示板が、被災者の情報交換に役立つ

1995 (平成7)
兵庫県南部地震 (阪神・淡路大震災)
死者6434名にのぼる。これを機に水道の施設が認識され、雨水利用の動きも広がった。

11.7% 企業 (300人以上)
3.3% / 96年 世帯
O157による食中毒発生
Ⅱ大阪府堺市
学校給食による学童の集団感染。この年の患者数9346名、死者11名。
24時間風呂メーカーに対し安全対策を指示Ⅱ通産省
レジネラ菌に対する関心が急激に高まった。

諫早湾干拓事業で潮受堤防閉鎖
Ⅱ長崎県
長良川河口堰問題と共通する部分があり有明海全体に及ぶ環境保全上の争点となっている。
改正河川法成立
河川管理の目的である「治水」と「利水」に「河川環境」(水質・景観・生態系等)の整備保全が加えられた。
水俣湾安全宣言Ⅱ熊本県
熊本県の水銀ヘドロ除去事業により、国の定めた魚介類の水銀濃度が低下したのをうけ、漁協も湾内の操業自主規制を解除した。

第1回世界水フォーラム
Ⅱモロッコ・マラケシュ
「京都議定書」採択
Ⅱ京都府
温室効果ガスの各国に対する排出削減義務などを定めた議定書。第3気候変動枠組条約締約国会議において。

このころ埼玉県越生町の浄水場で病原性原虫クリプトスポリジウムが混入し8705名が集団感染。
このころ抗菌剤の売れ行きが増加、緑茶が抗菌作用があると人気に。
容器包装リサイクル法施行
コンビニではペットボトル回収箱が義務化。

1996 (平成8)
梅雨前線、低気圧
鹿児島県出水市では大規模な土石流が発生し21人が死亡した。

ナホトカ号重油流出事故
Ⅱ島根県隠岐島沖
日本海沿岸の10府県におよぶ海岸に漂着し、環境および人間活動に大きな打撃を与えた。

矢作川河口堰計画休止Ⅱ環境庁
平成12年11月に事業中止が決定され、平成17年5月に基本計画は廃止された。
藤前干潟の埋め立てを断念
Ⅱ愛知県名古屋
日本最大級のシギ、チドリ類の飛来地として国際的にも重要視されている干潟。
大規模な苑池遺構を発掘
Ⅱ奈良県飛鳥京跡
池の中には噴水施設や中島が築かれ、水位を調節するための木樋や水路が付いた流水施設。

第7回世界湖沼会議
Ⅱアルゼンチン・ラカル湖畔
長野冬季五輪
開催決定に伴い、長野新幹線は在来線を活用する計画から専用路線を建設する計画に変更。
特定非営利活動促進法成立(NPO法)
ボランティア活動など民間の非営利団体に法人格取得を容易にするための法律。
環境ホルモンに関する汚染
全国実態調査Ⅱ環境庁
ダイオキシン、環境ホルモン汚染が問題に。

食料・農業・農村基本法の制定
それまでの生産者中心の内容に、国民への食料供給という新たな視点が加わった。
電力自由化
既存電力会社以外でも自由に売電できるように。食器洗い乾燥機、生ゴミ処理機、IH調理器、カメラ付き携帯電話が発売
家電リサイクル法本格施行
小売店に収集・運搬を、家電メーカーにリサイクルを、消費者には費用負担を義務付け。
森林林業基本法成立
水源涵養等、森林の有する多面的機能等が目的に加えられた。

1997 (平成9)
台風4号 記録的な豪雨
Ⅱ栃木県・福島県
那珂川流域および阿武隈川流域に大きな洪水災害が発生し死者・行方不明者22人。
台風8・7号
三重県上野で最大瞬間風速56.4m/s。住家全壊・半壊12008棟、一部損壊約4万9千棟。

11.0% 世帯
多数の河川でダイオキシンを検出Ⅱ環境省
環境省が10地域の河川を調査したところ、4地域で環境基準レベルを超えていた。
狂牛病発生Ⅱ千葉県
消費者不安が広がる。

第8回世界湖沼会議
Ⅱデンマーク・コペンハーゲン
携帯電話からのインターネット接続サービス開始
食料・農業・農村基本法の制定
それまでの生産者中心の内容に、国民への食料供給という新たな視点が加わった。

電力自由化
既存電力会社以外でも自由に売電できるように。食器洗い乾燥機、生ゴミ処理機、IH調理器、カメラ付き携帯電話が発売
家電リサイクル法本格施行
小売店に収集・運搬を、家電メーカーにリサイクルを、消費者には費用負担を義務付け。
森林林業基本法成立
水源涵養等、森林の有する多面的機能等が目的に加えられた。

2001 (平成13)
ヒートアイランド現象拡大
東京や名古屋など大都市部で、環境省

2000 (平成12)
停滞前線
台風14・15・17号
東海地方で記録的な大雨、約7万棟が浸水。名古屋市では約3万棟が浸水し、都市水害対策の緊急性を浮き彫りにした。

有珠山噴火
三宅島大噴火
鳥取県西部地震
住家全壊6501など
去予地震

2001 (平成13)
ヒートアイランド現象拡大
東京や名古屋など大都市部で、環境省

2000 (平成12)
停滞前線
台風14・15・17号
東海地方で記録的な大雨、約7万棟が浸水。名古屋市では約3万棟が浸水し、都市水害対策の緊急性を浮き彫りにした。

1999 (平成11)
梅雨前線、低気圧
広島県では土石流、がけ崩れなどにより31人が死亡したほか、JR博多駅近くでは地下街に濁流が流れ込み1名が死亡した。
東京の熱帯夜日数46日
平成6年の別島漏水時に次ぐ2番目の記録。

1998 (平成10)
台風8・7号
三重県上野で最大瞬間風速56.4m/s。住家全壊・半壊12008棟、一部損壊約4万9千棟。

有珠山噴火
三宅島大噴火
鳥取県西部地震
住家全壊6501など
去予地震

2001 (平成13)
ヒートアイランド現象拡大
東京や名古屋など大都市部で、環境省

2000 (平成12)
停滞前線
台風14・15・17号
東海地方で記録的な大雨、約7万棟が浸水。名古屋市では約3万棟が浸水し、都市水害対策の緊急性を浮き彫りにした。

1999 (平成11)
梅雨前線、低気圧
広島県では土石流、がけ崩れなどにより31人が死亡したほか、JR博多駅近くでは地下街に濁流が流れ込み1名が死亡した。
東京の熱帯夜日数46日
平成6年の別島漏水時に次ぐ2番目の記録。

1998 (平成10)
台風8・7号
三重県上野で最大瞬間風速56.4m/s。住家全壊・半壊12008棟、一部損壊約4万9千棟。

有珠山噴火
三宅島大噴火
鳥取県西部地震
住家全壊6501など
去予地震

2001 (平成13)
ヒートアイランド現象拡大
東京や名古屋など大都市部で、環境省

2000 (平成12)
停滞前線
台風14・15・17号
東海地方で記録的な大雨、約7万棟が浸水。名古屋市では約3万棟が浸水し、都市水害対策の緊急性を浮き彫りにした。

1999 (平成11)
梅雨前線、低気圧
広島県では土石流、がけ崩れなどにより31人が死亡したほか、JR博多駅近くでは地下街に濁流が流れ込み1名が死亡した。
東京の熱帯夜日数46日
平成6年の別島漏水時に次ぐ2番目の記録。

1998 (平成10)
台風8・7号
三重県上野で最大瞬間風速56.4m/s。住家全壊・半壊12008棟、一部損壊約4万9千棟。

有珠山噴火
三宅島大噴火
鳥取県西部地震
住家全壊6501など
去予地震

※折線グラフ：企業と世帯のインターネット普及率の推移 (1995～2004)

温暖化と生活意識

危機感の値段

「温暖化防止に支払ってもいい金額」を、
環境経済学の視点から
諸富徹さんに読み解いていただいた。
環境税と比べても格段に高額な金額が出た、
その調査結果の背景には、
いったい何があるのだろうか。

温暖化防止策は、投資指標

地球温暖化に関する報道は、今年
の初めから急に増えてきたよう
な気がします。そんな状況下での
調査結果は、興味深いですね。

まず「温暖化に対する意識」で
すが、20代が一番低いのは意外で
した。今の20代は、学校教育の中
で、初めて環境問題を体系的に学
習した世代なので、地球温暖化へ
の関心も、もっと高いと思ってい
ました。

ただ、温暖化の影響は、今すぐ
目に見える形でやってくるもので
はありません。むしろ、長いスバ

ンで発想しないと、危機を感じに
くい問題です。若いときは近い将
来だけに目が向きがちなので、ま
だ温暖化に対する危機意識が薄い
のかもしれない。

そう考えると、50代の意識がも
っとも高く、次が40代という結果
も納得できます。この年代は子供
がいる人も多いので、子供の未来
まで考えて、温暖化を危惧してい
るのではないのでしょうか。

もう一つ、40代、50代で企業に
属している人は、男女を問わず企
業内でも危機意識を感じていると
思います。

アメリカの企業では、投資家か
らのプレッシャーが非常に強くな



諸富 徹

もろとみ とおる

京都大学大学院経済研究科准教授

1968年生まれ。京都大学大学院経済研究科修了。
専攻は財政学、環境経済。2004年から1年間、
ミシガン大学客員研究員。

主な著書に『環境』（岩波書店 2003）、『環境税
の理論と実際』（有斐閣 2000）、『環境税の理論
と実際』（共著 日本評論社 1997）他。

つてきています。温暖化防止策を積極的に講じていることが、投資の重要な指標になってきたのです。この傾向が顕著になったのは2005年。巨大なハリケーン・カトリナがアメリカ本土を直撃したことで「アメリカ人の温暖化危機意識が急に高まった」といわれています。

ハリケーンの巨大化が本当に温暖化の影響なのか、因果関係の解明は難しいところですが、少なくとも温暖化を楽観視していた人たちが「やっぱり危ない」と感じるようになったでしょう。

保険会社などは昔から気候変動に敏感でしたが、カトリナ以降、他業種の企業も温暖化がもたらす損失額を、より深刻に考えるようになってきました。

このアメリカの流れが、日本にも波及しているのです。日本では銀行からの借入れで運営している企業が多いので、アメリカほど投資家からのプレッシャーはきつくないかもしれませんが、それでもここ2、3年、日本企業に投資している欧米の投資家から、温暖化対策への質問が矢のように寄せられているそうです。

実際、日本でも「温暖化対策はコストがかかるが、長期的には充分リターンする」と考える企業がが増えてきたように思います。

つまり単に高邁な精神で「地球環境を守らなければ」と考えているわけではなく、温暖化対策はもはや企業経営の意味からも、意識せざるを得ない状態になっているのではないのでしょうか。

さらに、40代、50代の人々は、身近な環境変化も体感しているかもしれません。たとえば地元の降雪量が少なくなったとか、ヒートアイランド現象が強まったとか。これらは一概に温暖化の影響だけでなく、都市化問題なども含んでいると思いますが、総合的に温暖化による変化が顕在化してきたと感じている可能性がありますね。

温暖化防止コスト

続いて「温暖化防止に払ってもいい金額」ですが、これは20代がもっとも高く、30代、50代は少ない。危機意識の調査と、矛盾します。

本来この設問は、危機感がダイレクトに表れるはずなのですが、金額で答えるため、可処分所得を反映する数字にもなっています。

つまり、この結果から推測されるのは、30代はローンがいちばんきつい年代なのか、ということだと思います。環境評価を所得単位で表わすと、どうしても背後の個人所得が出てきてしまう。ですから、こ

の結果を体系的に解いていくのは、ちょっと難しいですね。

ただ、月額の平均が2000円を越しているのは、かなり高いと思います。環境省が2005年に提案した環境税は、1tC（トンカーボン）当たり2400円。これを世帯単位で計算してみると月額1800円前後ですから、比較すると非常に高い。

20以上の県ですでに導入されている森林税と比べても、かなり高額だと思えます。たとえば高知県の森林税は、企業も個人も均等割り年間5000円ですから。

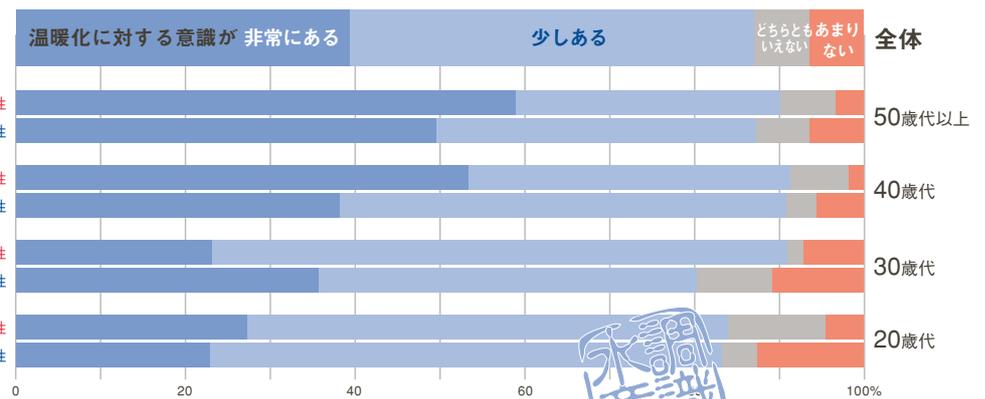
また、ヨーロッパ諸国で始まったCO2排出量に対する税と比較しても、非常に高い数字です。

ただしこれは、「自発的に払う金額」であって、「税金」ではない点がポイントかもしれません。「温暖化防止税」として支払ってもいい額を問えば、もっと低い数字になったような気がします。

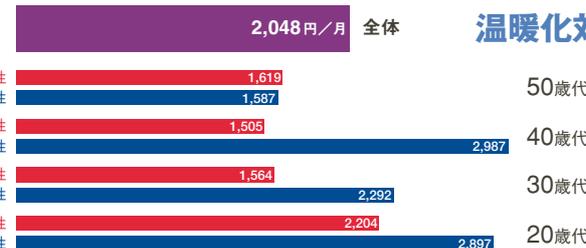
神奈川県に水環境税が導入されたとき、私も少しかわったのですが、その際、地元のNGOの人からこんな発言がありました。

「県が水質を改善してくれるなら積極的にコストを負担する用意があります。ただし、税収を特別会計に入れて、使い道が県民にわからないようでは困る」

つまり、「税」として納めると



温暖化意識



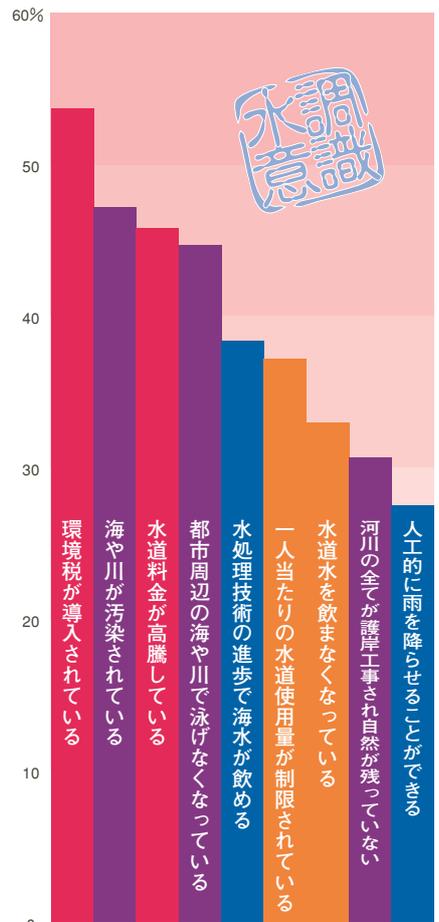
「温暖化に対する意識が非常にある」という人を年代別に見ると、年代が高いほど意識が高いが、支払ってもよい金額は逆に低くなっている。回答方式は、金額を自由に書き込むようになっているが、なんと10,000円以上と書いた人が5.9%もいる。

http://www.mizu.gr.jp/kekka/2007/01_q03.html

不透明な使い方をされる、という懸念が根強いんですね。これは神奈川県だけの傾向ではなく、日本国民全般にいえることだと思います。

ただし、もし私が温暖化防止に個人でお金を払うとしたら、いくらを想定するか。ばつと頭に浮かんだ額は10000円。特に根拠はなく、直感的な数字です。家計を圧迫せず、自分の昼食代から出そうとか、そのぐらいの感覚。

もし、「温暖化対策にはこのぐらいのコストがかかるので、個人レベルでこのぐらい出せば可能」という指針が示された上での回答な



100年後の水をとりまく環境は？

http://www.mizu.gr.jp/kekka/2007/01_q02.html

ら、別の数字になった可能性があります。この設問も、そんな情報提示されていけば、違う結果が得られたかもしれないですね。

私は、環境を保護するには社会の仕組みを変えないといけないと思っています。考え方の問題として、個人の努力を強調する政策は長続きしないと思うので、企業のCO2排出量を減らすとか、社会全体の仕組みを改善して、そこに個人の努力を組み合わせるほうが効果的だと思うのです。

「環境には最悪」の快適さ

最後に「100年後の水をとりまく環境」ですが、「環境税が導入されている」が1位になっていますね。それを「望ましい」と思っているのか、「やむを得ない」

と知っているのかは不明ですが、多分多くの方は、客観的な情勢から「導入せざるを得ない」と考えているのではないのでしょうか。

水に関しては、さらに汚染が進んでいる、と予想している人が多く。それは飲み水にする際の高度処理にお金がかかり、それに伴って水道料金が高騰するだろう、との判断でしょうね。

ただし、水にまつわる技術開発に関しては、皆さん楽観的。確かに海水を飲むようにする技術は日本がすでに実現していますし、人工雨も降らせられるだろうと考えている。そうした技術がありながら、やはり水汚染は進み、その処理に対する市民の負担額は増えるだろう、という予想ですね。

全体的に見ると、私が思っていたより、どの年代の人も温暖化が

進む未来を深刻に認識していると、思います。こうした認識があれば、環境に関する政策が示されたとき、冷静に判断して受容しやすくなるかもしれませんね。

私自身が考える100年後ですか？ 詳しい分析をしているわけではありませんが、理想通りの社会を実現するのは難しいかな、と思います。というのも、快適な生活に馴染んでしまうと、その習慣を変えるのは容易でないからです。

私は一昨年、アメリカ・ミシガン州のデトロイト近郊で1年間暮らした経験があります。広い家は、使わない部屋にも冷暖房が効いていて、移動はすべて車。ショッピングモールも役所も郊外ですし、鉄道やバスは発達していないので、移動手段は車しかありません。当然CO2排出が非常に多く、「環



境には最悪」のライフスタイルです。ところが、そう思いつつも、これがかかなり快適だった。時刻表にとらわれず、好きなときに好きな場所にハイスピードで走って行ける自由さ。これに慣れたら、燃費の問題も温暖化の危機意識も、いつの間にか薄れてしまったんです。

デトロイトにはかつて黒人暴動があつて、郊外に住人が移住したから中心地が空洞化した、という成り立ちがあります。長い自動車通勤を強いられているのは、そのため。コンパクトな町に戻すのに、大変な労力がかかる。ここでは、私も、温暖化のためにライフスタイルを変えることは難しかったで

すね。

ただ、そんな生活を体験したことで、アメリカ人より日本人のほうが、はるかにエネルギー効率を考えた暮らしをしていると感じました。現在でも、温暖化問題に対する情報量は日本のほうが多いような気がします。今後、決定的に町の構造や生活を変えるのは無理だとしても、「100年あれば何とか改善できるはず」と考えたいですね。





アラブと日本で「水の文化」はどう違うのか

生活文化に根差した水意識

池内 恵

いけうち さとし

国際日本文化研究センター准教授

1973年生まれ。1996年東京大学文学部思想文化学科イスラム学専修課程卒業、2001年東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程単位取得退学。専門はイスラム政治思想史、中東地域研究。日本貿易振興会アジア経済研究所研究員を経て、2007年より現職。主な著書に『現代アラブの社会思想-終末論とイスラム主義』（講談社 2002）、『アラブ政治の今を読む』（中央公論新社 2004年）、『書物の運命』（文藝春秋 2006年）他。



「水とかかわりの深い日本の文化」の調査項目には、酒造り、入浴習慣、稲作など、バラエティに富んだ回答が寄せられている。その元になった豊かな自然を、私たちは大事に守り、育ててきたらどうか。池内恵さんからアラブ諸国の水事情をうかがうと、忘れかけていたことが浮かび上ってくる。

風熱で風化するアラブの町

日本に生まれた我々は、水と緑は自然の恵み、と考えています。日本の文化は、水と緑が生んだ文化ともいえるかもしれません。

これと非常に対照的なのが、アラブ諸国です。アラブ諸国の中にも日本と近い風土を持つ場所が一部ありますが、ここではエジプトやサウジアラビア、イラクなどを中心にお話します。

アラブの土地を初めて訪れたとき、まず驚いたのは乾ききった灰褐色の大地でした。砂漠といえは我々は神秘的で美しいイメージを抱きますが、アラブの多くの土地は「土漠」です。

ナイル川、チグリス・ユーフラテス川の三角州地帯には、辛うじて緑があり、都市が形成されています。しかし、そこもスラム化している状態です。

建物も、白い漆喰壁が目立つ地中海沿岸地帯を除いて、大部分はレンガ造り。それが強烈な日差しと強風ですぐに劣化し、朽ちていきます。日本のように水が関与して腐食するのではなく、水が乏しいため乾燥したまま土に還るので

す。これほど水が希少なアラブ諸国では、太古から水の管理が大変重

要な問題でした。前近代まで、水を制する者が国を制していたのです。

現代でも、市民に水を供給することが、政治支配者の必須条件。極端なことをいえば、「水」「パン」「ガソリン」さえあれば、アラブの土地で何とか生き抜いていける。それプラス最低限の薬品と紅茶に入れる砂糖があると、人間として最低限の生活が営めます。

アラブ諸国の人々にとって、「自然」は愛でるものでも、守るべきものでもありません。乾いて沈黙するだけの自然に立ち向かい、生き延びてきたのがアラブ諸国の歴史なのです。

大河を巡る争い

ナイル川やチグリス・ユーフラテス川の名を聞くと、雄大な流れや豊かな古代文化を連想する人もいるかもしれません。

その流域では、現在も稲作が行なわれるなど、水に関係する文化が多少受け継がれています。ちなみに、稲作がもつとも盛んなのはエジプトで、普及しているのは日本と同じジャポニカ米です。エジプトの陽射しの下で作物を植える時、手をかけなくてもぐんぐん伸びる。二毛作、三毛作も行なわれています。



スペイン・グラナダの丘に建つアルハンブラ宮殿。上が、アラヤネスの中庭、中がライオンの中庭、下がヘネラリーフェ（天の楽園）。アルハンブラとは赤い城塞という意味で、水利システムの知恵と技術が巧みに盛り込まれ、現存するイスラム建築の最高峰。水を巧みに取り込むことで天国にあるという水の庭園のイメージを表現するのは、砂漠の多い地域で生まれたイスラムの水への憧れの表出でもある。（写真提供：愛知産業大学造形学部建築学科准教授 新井勇治）



コーランに戻ると、地獄の描写で強調されるのは、「渴き」の苦しみです。たとえば、罪人に与えられる「ザックーム」という架空の木の実。これを食べると「溶かした銅のように腹の中で煮え返り、熱湯のようにぐつぐつ煮え立つ」（第44章43〜46節）。そこへさらに、「ぐらぐら煮えた熱湯を飲まされる」（第56章52〜56節）。

アッラーを敬う善人には、教義で禁じられている酒までそろった楽園が用意されているのに対し、悪人が行く地獄にあるのは、食べると喉がよけい渴く果実や、腐った水。貴重なおいしい水を得られるかどうかは、アッラーの神への信仰次第、というわけです。

耐性ができると「水が合う」

現在、アラブ諸国の都市では、ほとんど水道が完備されています。もちろん飲める水です。とはいっても、これは現地の人に限った話。そもそも水には、その地域特有の成分が含まれているので、生まれたときからそれを飲んでいれば、自ずと耐性ができてきます。それを現地の基準で浄化したのが水道水ですから、元の水や浄化基準、給水設備が悪ければ、現地の人しか飲めません。「水が合う」と昔から言われるのは、こういうことなのでしょう。

私が住んでいたエジプトの人々

は、「ナイルの水」に誇りをもっているため、水道水がぶがぶ飲み、客にも勧めます。私などは、友人の家で出される水道水を飲んでたびたびお腹を壊し、苦しい思いをしていました。日本人は、アラブ諸国では水道水に手を出さないほうが無難です。

エジプトで私が日常飲んでいたのは現地生産のミネラルウォーターですが、実はこれも危ない、と言う人もいます。産業化で水源が汚染されてきている上、検査体制も不明です。

お風呂事情も、日本とはまったくかけ離れています。極端に清潔好きで入浴を楽しむ日本人の対極に位置しているのが、アラブ諸国

の人でしょう。彼らにとっては、体を洗う水が出ればそれだけでいいのです。

カイロの一般庶民向けアパートには、バスタブ付きのバスルームがありました。しかし、大家の息子さんに「シャワーカーテンをつけてほしい」と頼んだら、「何故それが必要なんだ？ 水は放っておけば乾くじゃないか」と言われてしまいました。バスタブに湯を入れて使うことはなく、バスルームの床は汚れているのが当たり前というのがアラブの人たちの感覚です。

人間環境は、自然環境に規定されて生まれます。頭の中ではわかっていても、アラブの厳しい自然

環境を目の当たりにしたことで、改めてそれを実感しました。

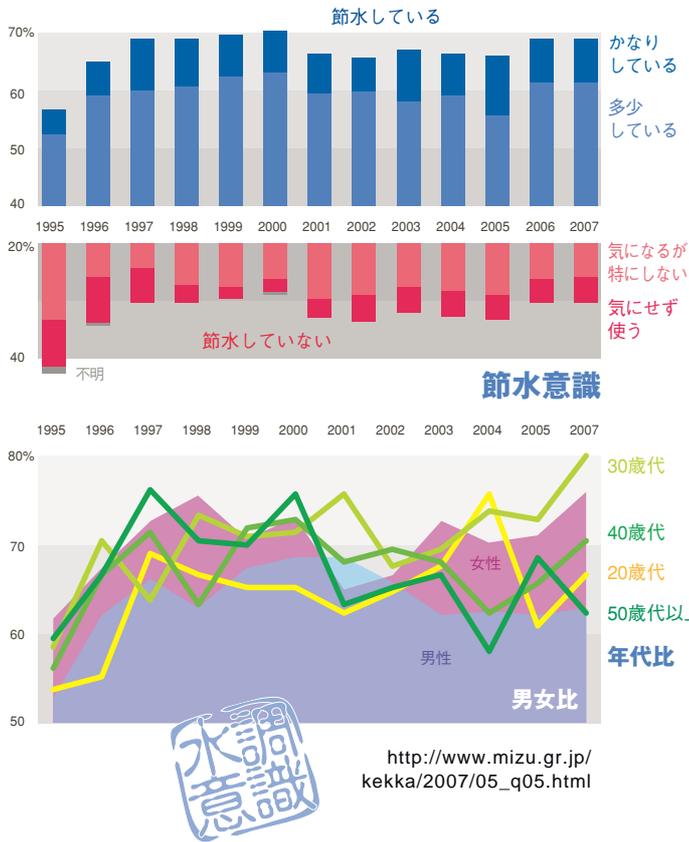
日本人の細やかさは、豊かな自然環境の中で育まれたものなのです。厳しい自然に手を加えて生活圏を確保してきたアラブの人たちに、日本的な感性を説明しても、うまく伝わりません。実際、アラブ人の細胞は、日本人の100倍ぐらい大きいのでないか、とよく感じたものです。

我々が水を巡る文化や環境問題を考えるとき、もともと存在していた自然環境の素晴らしさ、自然が循環している有り難さを、今一度思いだすことも必要かもしれません。



節水意識を 実現した 水研究

エコと快適を満たす
水洗トイレ最新事情



家電や日用品の世界では、もはやエコは当たり前。

実は水洗トイレも

30年間で4分の1の洗浄水量を実現してきた。

「お尻だって、洗ってほしい」

というCMコピーがお茶の間を驚かせて25年。

水洗トイレのオピニオンリーダー役を担うTOTO株式会社に、

ウォシュレットと水回り製品の進化史をうかがった。

それは76年のことです。

当時、水洗便器の洗浄に要した水量は、1回につき20ℓ。現在の機種は4倍の水を使っています。76年には、トイレ洗浄に使う水量を、20ℓから13ℓに減らすことに成功しましたが、開発のきっかけになったのは、前年に起きた「水不足」でした。

洗浄13ℓ時代は、20年近く続きました。開発のテンポが速まったのは、94年から。大10ℓ・小8ℓ時代から、およそ10年の間に大8ℓ・小6ℓ、大6ℓ・小5ℓへと進み、最新機種では大5.5ℓ・小4.5ℓを実現しています。

節水機種が進化した90年代の半ばから、お客様の「節水意識」も

究極は、掃除の水も節約

洗浄のさらなる節水については、水を流す速度と洗浄のクオリティとの兼ね合いで、難しくなっていくと思われま。

そこで当社では、視点を変えて節水を考えることにしました。汚れがつきにくく、洗浄しやすいタイプの便器を開発すれば、トイレ掃除に使う水量が減る。そう考えて完成させたのが、フチなし便器とトルネード洗浄の組み合わせです。

「汚れやすい」「掃除がしにくい」の2つは、いつも「トイレに対する不満」の上位を占めていました。中でもフチの裏の汚れは悪臭の元



川路 直彦

かわじ なおひこ

TOTO株式会社

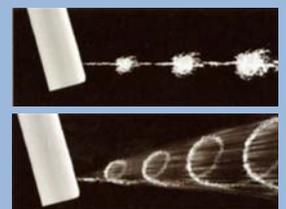
レストルーム事業統括部

ウォシュレット

販売推進グループ

急速に進んだ節水開発

従来の和式トイレに代わり、洋式トイレが急速に普及してきたのは1970年代。和式便器と洋式便器の出荷比率がほぼ半々になっ



上：あとから出てきた水玉が8cm先の地点（お湯の発射口からお尻までの距離）で前の水玉に追いつくことで、大きな固まりになる仕組み。下：高速で円を描きながらお湯を噴出。どちらも従来の2分の1の水量で、満足感と洗浄効果をかなえることができる。水量の如何にかかわらず、たっぶり感を感じさせるのは、実際の洗浄効果だけでなく、満足感にも大きな影響を与えるという。

にもなりやすいので、その意味でもメリットがあります。

しかも最近の便器は、独自の防汚技術で便器表面の凹凸をナノレベル（100万分の1mm）まで減らし、滑らかにすることで汚れを付きにくくしています。

フチなしタイプの便器が実現したのは、徹底した水流研究の成果です。少ない水で完璧に流す、汚れが付きにくい、掃除がしやすいという工夫が、エコロジーにもつながった、と自負しています。

エコでいえば、使用するたびに内蔵した羽根車が回転して発電する便器も開発しました。発電タイプの便器は、今のところ公共スペースだけで使われています。

一方、バスルーム空間の節水研究・開発も進行中です。最近の例では、オン・オフを手元で切り替えられるシャワーを開発しました。また、シャワーの穴の大きさ自体を替えて節水できるようにしたり、シャワーから出る水に空気を含ませて、同じ洗浄感を得ながら自然と節水できるタイプもあります。浴槽も、形状を工夫して節水を図るタイプが当たり前になってきました。

機能 VS 美しさ

当社は70年代から海外にも進出

していますが、トイレやお風呂に對する意識や要望には、お国柄が表れます。

90年に進出したアメリカは、州ごとに水量制限が規定されていて、たとえばカリフォルニア州では「6ℓ以下」と定められています。当時、私たちが日本で製造していた便器は、10ℓタイプ。実はアメリカ市場で生き残っていくために、節水型便器の研究・開発に拍車がかかったわけですね。

ところで、日本には水洗トイレで流す水量の規制はありません。下水道の合流地点までしっかり流れるかどうかが重視されるので、メーカーには洗浄の「水量」ではなく「性能」が求められているのです。こうしたこと一つをとって、国によってかなり違いがありますね。

欧米の便器は、デザイン的美しさ特徴。特に、ヨーロッパの便器には美しいものがたくさんあります。

欧米では、バスタブとトイレが一緒の空間にあるので、バスタブに浸かっているときに便器も視野に入るわけです。そのためデザインを美しくして、オブジェ感覚で眺められるものへと発展したのではないのでしょうか。

一方日本ではトイレ空間に欲しいものとして、「テレビ」や「冷

房装置」を挙げる人がいるほどで、あくまでも「個室」です。そのため、美しさはさておき機能性や清潔さを求めたような気がします。

ウォッシュレットの登場

「お尻だって、洗ってほしい」というCMコピーを覚えていらっしゃるでしょうか？ 82年のテレビCMで使ったコピーですが、これが知名度と普及率を高めました。

この商品が誕生したのはその2年前、80年のことです。その原型となったのは、米国のアメリカン・ピテ社が開発し福祉用品として扱われていたウォッシュ・エア・シートです。

当社では一般用として輸入販売していたのですが、お湯の温度調節が不安定だったり、いくつか問題点がありました。そのため、自社開発に踏み切り、ウォッシュレットが生まりました。

開発には当社の社員が大勢かわり、ノズルの位置や、快適なお湯の温度を決めていきました。その過程での苦労話がたくさん残されています。

現在、特にアメリカと中国での普及に力を入れているところです。また、今後の戦略としてヨーロッパを視野に入れています。やは

り、一度試してみないと良さがわからない商品なので難しいのですが、経験していただければその良さをご理解いただけると思います。

数字には表れませんが、便座を温める機能が脳梗塞などの危険を回避してきたということもあると思います。妊婦さんや痔で苦しんでいる方にも大変喜ばれてきました。

日本における普及率は6割。「日本人の清潔志向は度を越している」と受け取られた時期もありましたが、あつて当たり前の日常品として、市民権を獲得してきたように思います。

水のテクノロジー

洗浄水を常に適温でタンクに貯めておくタイプを貯湯式、タンクのないタイプを瞬間式といいます。瞬間式には課題がありました。

冬の寒い時期には、低温の水をすぐ38度にするには、ヒーターの容量が小さすぎたのです。ヒーターの容量に合わせて水量を減らすと、ちよろちよろとしか噴出されません。洗浄には「節水」を望むお客様も、「たつぷりの湯量」が欲しい」と望まれます。こうした声に応えたのが99年に発表した新機種です。

水の噴出方式を変えることで、

従来の2分の1のお湯量でも「たつぷり感」が味わえるように改良を加えたものです。

水の噴出方式の改良には、あとから出てきた水玉が8cm先の地点で前の水玉に追いつくことで、大きな固まりになってお尻に当たる仕組みと、高速で円を描きながらお湯を噴出する仕組みがあります。ちなみに、お湯の噴出口からお尻までの距離は8cmほど。強弱をつけた吐水は、1秒間に70回以上も噴射されます。

実際には充分洗えているとしても、満足感が感じられないとお客さまに納得してもらえません。噴出方式の改良は、洗浄という機能と満足感の両方を満たすことを目標にしたわけですね。

水はこのように工夫次第で大きな可能性を秘めています。当社はその開発に日々しのぎを削っています。

これからの日本のトイレは、空間としての美しさの追及に向かう気がします。音楽を流す、あるいは香りを漂わせるといった、空間全体をより快適にする機能もラインアップしています。かつてご不浄と呼ばれていたトイレとは、隔世の感がありますね。



みずみずしいと感じる有名人

有名人ランキングには、いろいろな種類がありますね。でも、『みずみずしいと感じる有名人』のアンケートは初めて見ました。僕自身も、これまで「みずみずしい」という切り口で考えたことがなかったですしね。

みずみずしさの基準で、何だろう？

「新鮮」とか「旬」なイメージですかね。アイドルで言えば、「清純」もキーワードかもしれない。健康的な輝きも、みずみずしさの要素でしょうね。

スポーツ選手なら、「さわやか」な感じが決め手かな。泥臭かったり、暑苦しい印象じゃなく、汗がさらっと光って見えるタイプ。

そう考えて07年のランキングを見ると、ほぼ順当な感じですね。1位の長澤まさみは「スター」という言葉が似合うし、妥当だと思います。

一つだけ意外だったのが、藤原紀香の3位。彼女はセクシー系ですけど、「セクシー」と「清純」で正反対ですよ。ただ彼女の場合、均整のとれた体育会系のプロポーションだし、結婚式がさわやかなイメージだったから3位に入ったのかな。

96年のランキングでは、西田ひかるが1位、山口智子が2位だったのが意外です。どちらもデビューは88年ですけど、96年は山口智子が理想の女性の筆頭だったころでしょ。西田ひかるは確かに爽やかなイメージではあったけど。

松嶋菜々子は、両方の年に7位ランキングしてますね。みずみずしさってそう長年は続かないはずだけど、清涼飲料水のCMに継続して出ていると、フ

レッシュなイメージが崩れないのかもしれないですね。

07年のベスト10で特徴的なのは、96年にイチロー1人だったスポーツ選手が3人も入っていること。9年前に比べると、スポーツがエンターテイメントとして扱われることが増えてきたので、その表れでしょうね。全般的にスポーツ選手がタレント化しているし、スターも生まれやすい。

アイススケートでは、やっぱり浅田真央。

「ハンカチ王子」の斎藤佑樹と「ハニカミ王子」の石川遼は、どちらも王道のさわやか系。無垢な感じでも、マスコミへの受け答えなんかはそつなく上手にこなすし、昔の純朴なスポーツ青年とは一味違う。

古風と言えば、長澤まさみもけっこう古風な感じがします。デビューしたころの吉永小百合を思わせる、正統派スター的な雰囲気か漂う人です。

吉永小百合は今年9位に選ばれていましたね。これはちょっと驚きでした。60年代にこのアンケートがあれば、絶対1度はトップに選ばれたらうけど、07年にもランキングされるなんてすごい。

時代は螺旋状に巡ってますから、今は60年代の空気を感ぜさせる人が新鮮に見える時期なのかもしれないですね。

もし70年代、80年代にこのアンケートがあったら、アイドルではどんな人が選ばれていたかな。70年代の前半なら、南沙織、麻丘めぐみですかね。男性なら、郷ひろみ、西城秀樹、野口五郎。スポーツ選手



泉 麻人

いずみ あさと

コラムニスト、作家。1956年東京都新宿区生まれ。慶応大学商学部卒。1979年に東京ニュース通信社に入社。『週刊テレビガイド』などの編集に携わった後、1984年からフリーのコラムニストに。コラム・小説を発表するほか、「テレビ探偵団」「出没！アド街ック天国」などのテレビ出演・司会を手がけ、若者文化、レトロカルチャーや東京風俗のオーソリティとして活躍中。主な著書に、『ナウのしくみ』（文藝春秋 1987～）、『お天気おじさん への道』（講談社 2005）、『青春の東京地図』（筑摩書店 2007）など。



今、最もみずみずしいと感じる有名人は

1996

- 1 西田ひかる 8.1%
- 2 山口智子 6.8%
- 3 イチロー 4.8%
- 3 安室奈美恵 4.8%
- 5 観月ありさ 4.2%
- 6 鶴田真由 2.9%
- 7 松嶋菜々子 2.6%
- 8 内田有紀 2.4%
- 8 木村拓哉 2.4%
- 10 ともさかりえ 2.0%
- 10 瀬戸朝香 2.0%

2007

- 1 長澤まさみ 15.8%
- 2 斎藤佑樹 7.8%
- 3 藤原紀香 7.3%
- 4 上戸彩 5.7%
- 5 石川遼 4.2%
- 6 浅田真央 3.4%
- 7 松嶋菜々子 2.6%
- 8 成海璃子 2.3%
- 9 吉永小百合 1.8%
- 9 仲間由紀恵 1.8%
- 9 蛭原友里 1.8%

http://www.mizu.gr.jp/kekka/2007/03_q01.html



では、野球の太田幸司や原辰徳がみずみずしかったですね。

70年代後半はピンク・レディーもいたけれど、みずみずしさならキャンディーズでしょう。それとアグネス・ラム。彼女は今でいうグラビアアイドルですが、当時はそんなジャンルがなかったし、ピンナップ撮影が主な仕事。今の人気グラビアアイドルはバラエティー番組でポケ役なんかもやるので、ラムのころとはイメージが違う。

80年代は松田聖子、中森明菜、早見優が上位に入ったと思います。男では田原俊彦、野村義男、近藤真彦のタノキントリオ。これ以降は、ミュージシャンやアーティストの時代になって、アイドルは小粒になりましたね。

最後に、来年、調査をしたら選ばれそうな人を予

想してみると、長澤まさみは、また上位に入るんじゃないかな。それと、蒼井優が上位になる気がします。蒼井優は長澤まさみより少し影があるタイプ。長澤が大河だとすると、蒼井は谷川を思わせるみずみずしさなんです。今『どんど晴れ』に出演してる比嘉愛未ひがまなみや、『のだめカンタービレ』の上野樹里も入ってくるかもしれない。

長澤、蒼井、比嘉、上野、それに今年4位だった上戸彩も含めて、コメディーがうまいのが共通点です。コメディーセンスのある若手女優がみずみずしく見えるっていうのは、これまでになかった特徴かもしれませんね。(談)



なぜ名古屋の水はおいしいのか

ご当地水道水、飲み比べ



水の生活意識調査で13年間続いている「水道水の10点満点評価」では、常に点数が高い中京圏。その真相を探ってみました。また、東京圏、大阪圏でも徐々に評価が上がりつつある水道水だが、その背景に何があるのだろうか？

利き水会を開催

水の生活意識調査で13年間続いている「水道水の10点満点評価」では、東京圏、大阪圏に比べて、中京圏は一貫して点数が高い。タイトルでは名古屋としたが、実際には岐阜県、愛知県、三重県が対象。

水道水は、自分が住んでいる地域のものしか知らないことが普通。他地域と比べてみるわけでもないのに、10点満点の評価で中京圏の点数がいつも高い、というのも不思議な気がする。

そこで、東京圏、大阪圏、中京圏がそれぞれタップウォーターを市販しているので、編集部で利き水会を開き、味わってみることにした。

東京は「東京水」、大阪は「ほんまや」、名古屋は「名水」で、ボトルのデザインも県民性を反映しているようだ。「名水」は名古屋の水と名水をかけてシヤレているのである。以前はペットボトルも販売していたが、災害用備蓄飲料水として保存期間を長くするためにボトル缶となっている。

利き水を行なう前に、後ほどご登場いただくサントリー（株）健康科学センター所長の平島隆行さんに、正しいやり方について指導

を仰いだ。平島さんは世界各地の水を飲み歩いた人。いわば水の味の違いがわかる男だ。

まず官能検査には種類があつて、

【識別型官能検査】

・工場毎日つくっている製品が問題なくできているか

・お客様から何かいつもと違う味だとかご指摘があつた場合に確認のため実施

【嗜好型官能検査】

・新規の水源を調査し、商品に向いているかどうかを判断する場合

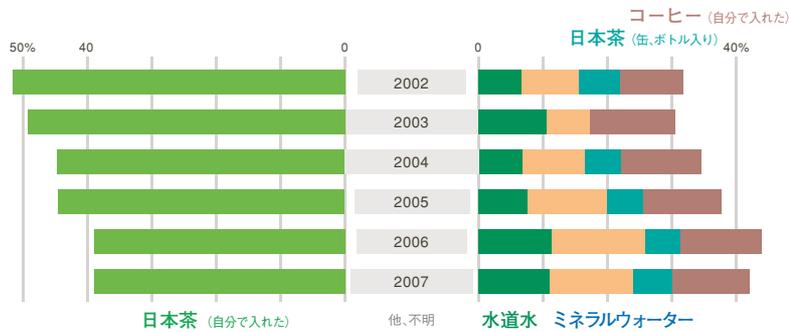
・他社の製品と自社製品との味の違いを表現する場合

の2つに大別できるという。

特に識別型官能検査の場合は、特別な味、匂いがわかる能力保持者があたるという。

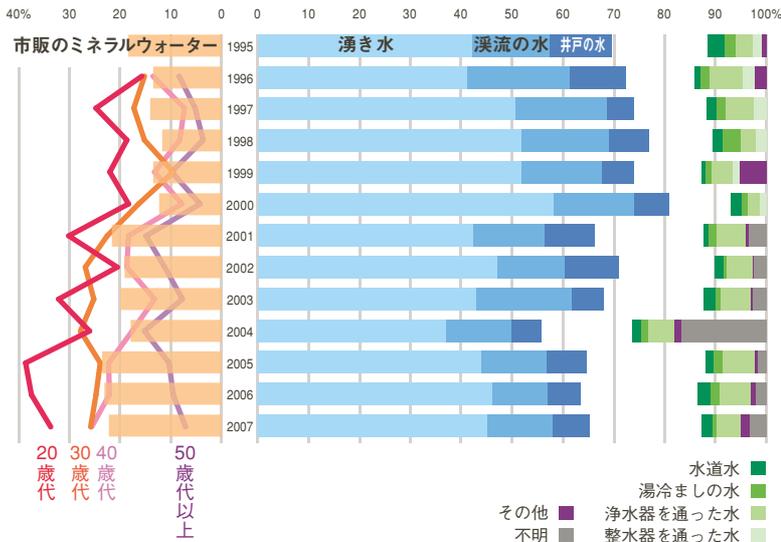
他の匂いに影響されない部屋や空気の流れ、といった細かい環境設定が求められると知り、我々には荷が重いと緊張したが、今回はまったくの素人集団による水道水の飲み比べなので、緩い基準の下、試してみることにした。

もし、ミネラルウォーターなどと比べてしまうと、塩素臭の有無で水道水がかなり不利になるので、比較対象は設けないこと、水温は普通飲むときの温度（蛇口から出てきた温度にそろえること、といった程度のアドバイスを反映させて実施することに。紙コップだと



あなたがよく飲む飲料

あなたが一番おいしいと思う水



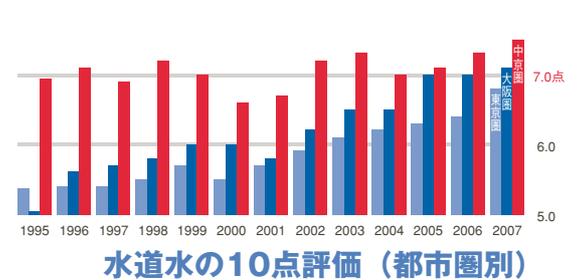
水道水の評価が高くなっていくとともに、不満点が減少している。おいしい水は、『湧き水』『溪流の水』『井戸の水』などの自然の水の合計が、6割を超えているが、『市販のミネラルウォーター』が徐々に増えている。牽引者は、20、30代。

http://www.mizu.gr.jp/kekka/2007/02_q01.html

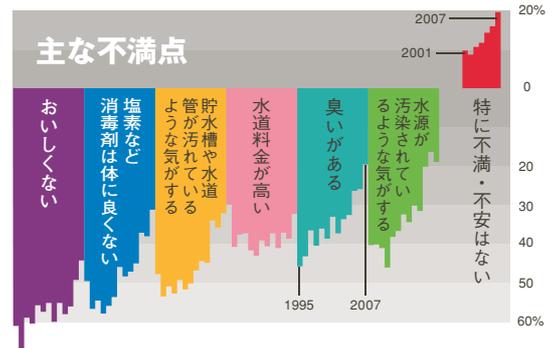
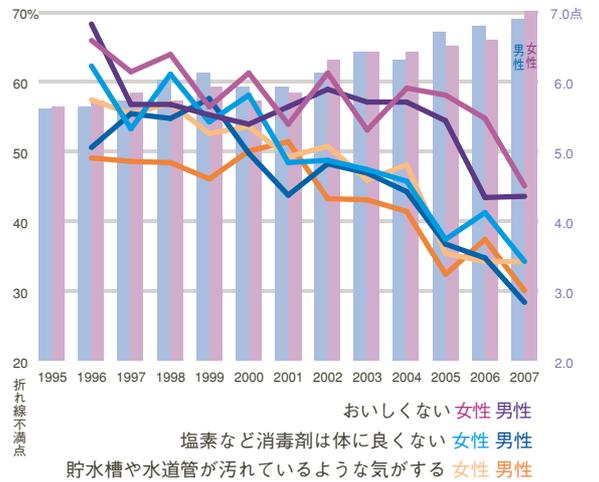
水道水かを当てることに。8人が挑戦し、正解者は2人。一番臭いのがつく、硬く感じられた水が「ほんまや」。臭いは薄い

「これは、後味が悪いな」とそれぞれが感想を洩らす。結局、細やかな官能コメントは無理ということになり、「硬いか軟らかいか」「臭い（塩素臭？）の強さ」を各自が感じたままに述べ、おいしい順に評価をすることになった。そのあとで、どれがどの水道水かを当てることに。

「東京水」、「ほんまや」、「名水」を注ぐ。一同、神妙な面持ちで水を口に含むのだが。「臭いがきつい」「塩素臭いな」「これは、後味が悪いな」とそれぞれが感想を洩らす。結局、細やかな官能コメントは無理ということになり、「硬いか軟らかいか」「臭い（塩素臭？）の強さ」を各自が感じたままに述べ、おいしい順に評価をすることになった。そのあとで、どれがどの水道水かを当てることに。



不満点と水道水の10点評価（男女別）



とりあえず、結果発表

それ自体の臭いに左右されるので、せめてガラスコップを用意することにする。官能コメントに関しては、臭いのコメント（カビ臭、鉱物臭など）
・ミネラル感（硬いか軟らかいか、塩味の有無）
・苦味、渋み、酸味のバランスをそれぞれで比較し、総合判断でおいしさの点数をつけるというのが、果たしてそこまでわかるのかどうか。はなはだ、心もとない。

が後味に嫌な雑味が残るのが「名水」で、名古屋の水はおいしいという先入観が打ち破られる結果になった。この時点では、一番評価が高かったのは「東京水」で、「名水」がまずく感じたのはボトル缶臭であるということでも落ち着いた。この判定結果は、後ほど平島さんのところでまったく覆ってしまっただが、この時点では、利き水会を実施したという達成感で満たされている編集部であった。

県民性という可能性

ところで名古屋の人は、各地の水道水を飲み比べたわけでもないはずなのに、10点満点の評価で常に高得点をつけるのは、なぜなのか。

その理由を、〈県民性評論家〉として『名古屋学』（新潮社 2000）などを著す、(株)エディットハウス代表の岩中祥史さんに掘り起こしていただいた。



岩中祥史さん

ご本人は人生でもっとも多感な時期を名古屋で過ごしている。名古屋を離れたことで気づいた、名古屋（人）の長所・欠点を独特の視点で論じ、ときには辛口のコメントを口にしながらも、名古屋と名古屋人に対しては深い愛情を持っている人だ。

岩中さんに、水の生活意識調査の結果を見ていただいた。

「アンケート結果に触れる前に、県民性から性格判断をするということに拒否反応を抱く人もいるでしょうから、私が県民性の違いを

論じる理由をご説明します」

と岩中さん。まずは、生まれ育った場所の自然環境から受ける影響を語った。

「大海原に開けて、太陽がさんさんと照る場所と、日も差さず交通の便が悪い山あいとは、人間に与える影響は違はずです」

次に、後天的な社会環境。

「徳島ののんびりした田舎に蜂須賀小六が名古屋からやって来たことで、人々は今までの生き方を変えなければなりません。しかし、名古屋流の勤勉さを身につけたお蔭で、今では四国の中でも一番貯蓄が多い県です」

最後に食に代表される生活環境。「沖縄は男女ともに長寿県でしたが、アメリカ式の食生活が浸透したせいで、一気に平均寿命が短くなってしまいました。お年寄りが減れば、それまで維持されてきた敬老精神が途絶えることになるかもしれません」

と、このように自然・社会・生活といった環境は、人間の性格や気質の形成に深い影響を与えているはず、と言うのだ。

「そこでいよいよ名古屋の話です。戦国時代から江戸時代にかけて、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という天下取りを目指した殿様は、すべて愛知県から出ています。そして蜂須賀小六に限らず、日本の

少なくとも6割は尾張、三河出身の殿様が支配することになったのです。昔から名古屋スタンダードとされている堅実さは、実を言

うと、こうした尾張、三河出身の殿様を通じて全国に広まっていたんです」

岩中さんは、それが今に至って、銀行や国を頼らない堅実さにも結びついている、と言う。

でしゃばりが嫌で7点

また、戦国時代の下剋上を目の当たりにし、庶民は「今がどんなに良くても、明日はどうなるかわからない」と肝に銘じるようになる。そこで、自衛手段として「目立つてはいけない」という価値観が浸透した。

「名古屋の人は水道水だって、心の底では9点とか10点とかつけたらと思ってるんです。それは単なる郷土愛ではなく、本当においしいと思って飲んでいると思えます。でも、そんな高得点をつけたら目立ってしまう。8点でもまだ『でしゃばりかな』と思うのが名古屋人。だから7点、というのは私には痛いほど理解できます」

大阪に関しては、同じ論理で逆な評価が表れたのでは、と言う。「大阪の水は水源が悪いために、本当にまずかった。今は良くなっ

たけれど、平成ヒトケタ時代は特にまずいと言われました。10点満点でいったら3点がいいところ

でも、東京に負けたくないから5点かな、という感じじゃないでしょうか。さすがに7点では凶々しすぎるでしょう」

そういう意味では、東京が一番正直なのかも、と岩中さん。

「東京の人は、東京日本だと思ってるから、ローカリティーが稀薄なんです。他の地域のことなんか、まったく気にしていないと思いますよ」

大阪は目立ちたがりでサービス精神が旺盛、名古屋は他所からどう見られるかを気にする、東京はローカリティーが稀薄。そんな県民性の評価も、あながち間違っていない気がする。そして、水道水の評価結果も、岩中さんの説を反映しているようにみえる。

「実際に名古屋の水道局は頑張っていますよ。江戸時代の初めまでは水害も多く苦労しましたが、その分土地は肥えています。だから基本的に豊かな土地柄なんです。尾張の殿様は、年貢も厳しく取り立てなかったし。慎重しやかで自慢しないところは、そんな背景があつて育ってきたんでしょね」

名古屋の人の控えめな県民性を語りつつ、「でも名古屋の水がおいしいのは本当だ、10点満点をつ

けてもおかしくない」そう言う岩中さんの説は、なかなか面白い。

塩素臭？ 実は

サントリー(株)健康科学センターに平島さんを訪ねた。ここは蒸溜所をつくった山崎のすぐそばにある。敏感な舌の持ち主である平島さんに「東京水」、「ほんまや」、「名水」を手土産に持参し、味わ



河野 浩さん



樋口直樹さん



平島隆行さん



会話は、一体何だったのだろうか、編集部一同、大変なショックを受ける。

「ペット詰め飲料で残留塩素は認められていませんから、この化学的な臭いは容器から出ているものです。これらを改良すれば、もっとおいしく飲める水道水を売り出せるはずですよ」
と平島さん。

水道局がミネラルウォーターのビジネス上のライバルとなるには、もう少し時間がかかりそうである。
衛生や安全からおいしさへ

1957年（昭和32）に制定された水道法は、衛生や安全を第一とした水質基準を定めたために、水のおいしさについては言及してこなかった。

しかし近年は、消費者が質の高い水道水を求めるようになったため、水質基準を補完するものとして、当時の厚生省はまず、色や臭い、濁り、味覚などに関する「快適水質項目」と将来的な懸念を監視していく「監視項目」を設け、それぞれに目標値を定めた。水の味が大きく取り上げられるようになると、厚生省の「おいしい水研究会」は「おいしい水の要件」を発表。さまざまな場面で水道水の指針として使われるようになった

っていたら、くことにした。

サントリー（株）水科学研究所
所長兼 R&D 推進部部长で理学博士の樋口直樹さんとサントリー（株）水科学研究所 主任研究員の河野浩さんも同席してくれた。

「容器由来の臭いや味がきてますね」
「容器の材質選択や充填時の温度管理に問題があるようです」

とのこと。このペットボトルやボトル缶で水道水を評価したら、

水道局の努力が無駄になって気の毒だ、という。

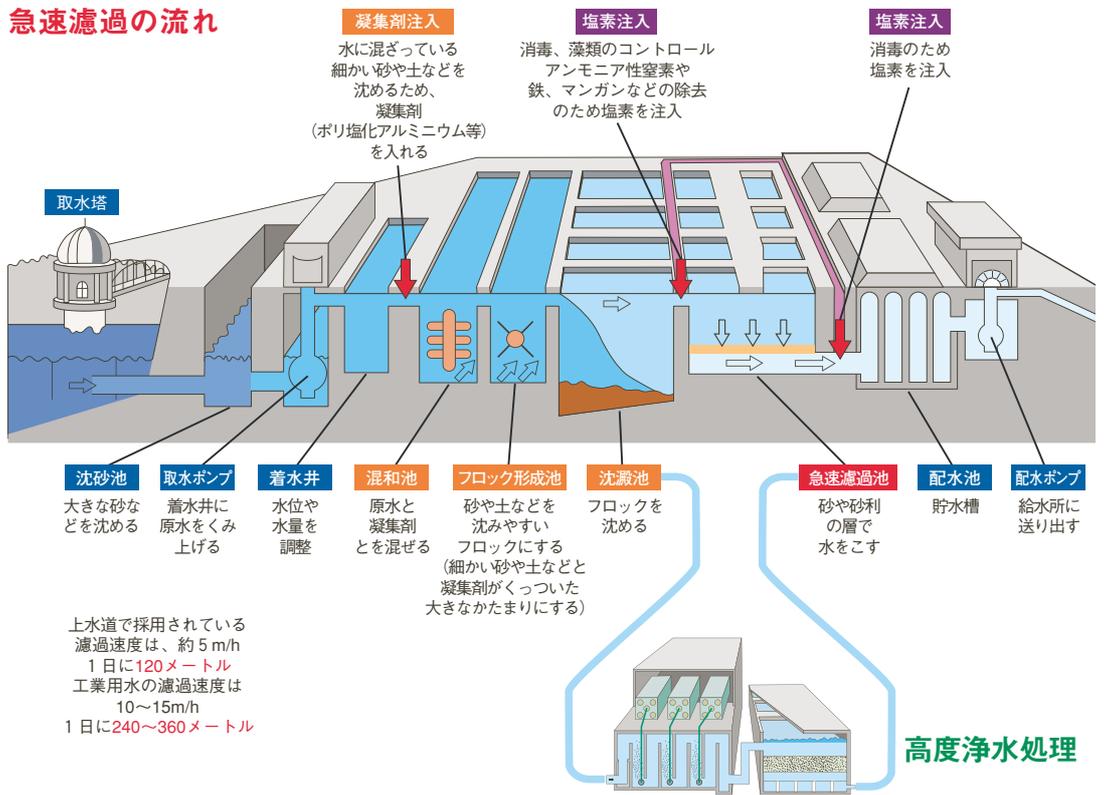
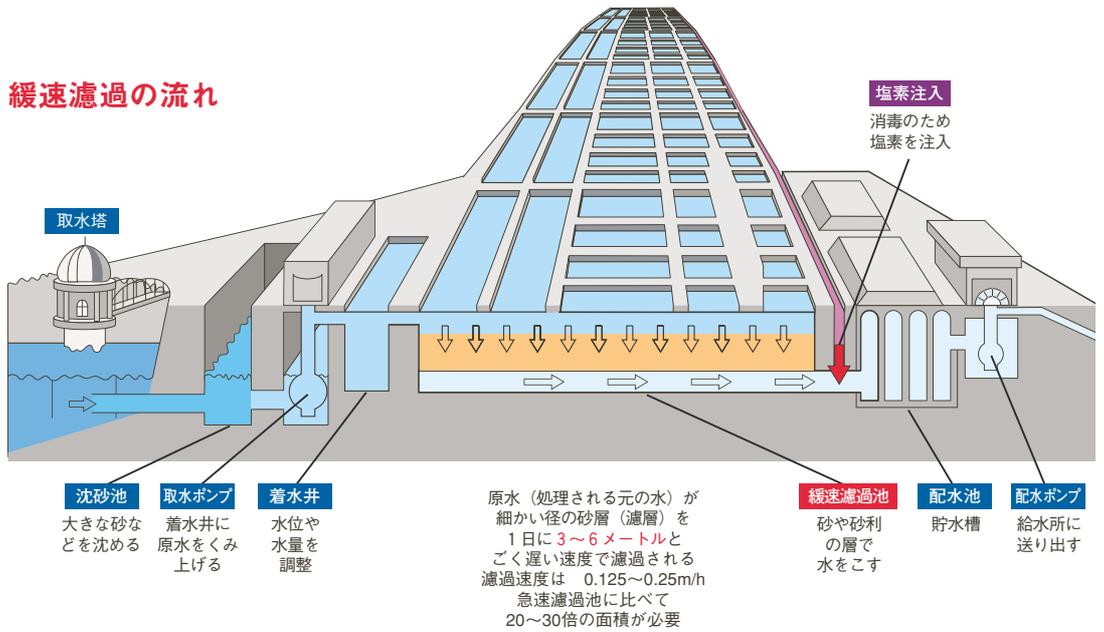
「水道局もこうした製品でウォータービジネスの世界に進出されたつもりかもしれませんが、味の評価でかえって逆効果になっているかもしれないですね」

つまりペットボトルの材質の選定や、充填方法などに課題が残り、記載してはいけない採水地が明記されていたり、商いとしてはまだまだというのが正直なところだろうだ。

しかし、驚いたのはこのあとの評価で、これほどきつい臭いを差し引いて、水としての本質を判定している。

さすがはプロ。
「軟らかくて、悪くない水ですよ」という言葉に、思わず
「こんなに塩素が入っているのに、水の味がわかるんですか」と聞くと、

「塩素は入っていませんよ」と言われてしまった。
それではあの利き水会のとときの



おいしい水道水の要件

水質項目	数値
蒸発残留物	30～200mg/l
硬度	10～100mg/l
遊離炭酸	3～30mg/l
過マンガン酸カリウム消費量	3mg/l以下
臭気度	3以下
残留塩素	0.4mg/l以下
水温	最高20以下

（1985年に当時の厚生省「おいしい水研究会」によって発表）

東京都水道局と広島県三原市のホームページを参考に作図
<http://www.waterworks.metro.tokyo.jp/pp/hakken/h06.htm>
<https://www.mihara-waterworks.jp/topics/kansokuroka.htm>

のである。
 2004年（平成16）の改正では、これを一歩進めて、27項目の「水質管理目標設定項目」と40項目の「要検討項目」が導入され、水道水の味への追及はいつそう深

ら、一言で東京圏の水道水うんぬんということは言えません」と河野さん。要は「原水が良ければ塩素も低く抑えることができるので、おいしい水道水もある」というのは意外な話だった。しかし、汚染が進んだ多くの原

水に対処するため、厚生省では1988年（昭和63）に「高度浄水施設導入ガイドライン」を作成。高度処理施設に対して国庫補助制度を発足させた。高度浄水を行なうことで、通常

の急速濾過（沈澱や濾過、消毒）では充分に対応できないカビ臭やカルキ臭の原因を取り除き、トリハロメタンのもととなる物質などを減少させることができる。東京都の金町浄水場では199

2年度(平成4)から、朝霞浄水場では2004年度(平成16)から、大阪市の柴島浄水場下系では1998年(平成10)から、庭窪浄水場系では1999年(平成11)から、柴島浄水場上系と豊野浄水場系では2000年(平成12)から高度浄水処理を開始している。水の生活意識調査の評価が上がり始めたのも、高度浄水処理の開始と無関係ではあるまい。

お墨付 名古屋の水はおいしい

では高度浄水処理は万能なのだろうか。

「決してそうではない」と河野さんは言う。

実は名古屋の水道水には、おいしい理由があったのだ。

「名古屋の水道水は、実際に高い評価を受けています。その理由の第一は、主な水源である木曾川がきれいなことが挙げられます。

また、名古屋市水道局は良質な原水確保のために下水道の整備や水源地の環境保全にも積極的に取り組んでいます。

そして、今でも緩速濾過設備が活躍しています」

砂を使った緩速濾過は、微生物が汚染原因を分解するので、薬剤を使う必要がない。つまり、まず

くならないというのだ。

「原水が良ければ緩速濾過でやりたいところですが、これは大変時間がかかり、広大な敷地を必要とします。したがって東京や大阪のように人口が多い地域、また取水する原水が悪いところでは緩速濾過は難しいかもしれません」

おいしい水とは何ぞや

水道水を対象に考えられた(おいしい水の要件)は天然水には当てはまらない、と言う河野さん。

「例えば硬度に関していえば、嗜好に変化が見られ、日本人も硬度の高い水を好んで飲むようになってきたから、一概に軟水がいいとは言えない状況になっています」

また(おいしい水の要件)によれば、冷やして飲めばおいしく感じるわけだから、集合住宅の貯水タンクに溜まってぬるくなった水などは、別の意味での問題であって、それまでを水道水の責任と見てしまうのも誤りだ。

ちなみにサントリーでは硬度100までを軟水、100から300を中硬水、300以上を硬水と定めているが、一般的には軟水と思われている水道水の硬度も、例えば沖縄県のように、所によつては200、300を越える地域もある。



「要は慣れるとおいしいと感じてくるんです。ブラインドテストで水道水を飲んでもらったところ、日頃飲んでいる水道水の評価が高かったという結果もあります」

こうした数値に表しにくい水の本当のおいしさは、どう定義したらいいのだろう。河野さんも、今までは数値化しやすい物性分析が

先行していたが、専門テイスターによるテイ스팅と味覚センサーによる分析も合わせて総合評価する必要性を感じているという。「天然水醸造をやつてから、小売店さんや消費者の方々に、天然水とは何か、を説明する機会が多くなりました」

サントリーでは2005年から「水と生きる」をコーポレートメッセージとして掲げ、それと連動してすべてのビールを天然水醸造に切り替えた。そのため、今まで以上に水に対する説明が求められているというのだ。水への意識がかつてないほど高まっていることの表れといつていいだろう。

工場で行なわれる従来の官能検査は識別型で、異味、異臭がないかどうか、加温して確認する。しかし水科学研究所では「おいしい水とは何か」という問いに答えるためにも、識別型、嗜好型に加え新たに評価型の尺度づくりを作成中である。専門テイスターによるテイ스팅の際に用いられる官能コメントを整理統合し、水の味を表現する共通言語づくりを進めているそうだ。

塩素の臭いにホツとする

最後に世界の水を飲んできた平島さんから、驚かされる発言があ

った。海外で塩素臭がすると、ある意味ホツとするというのだ。

「衛生状態の良い地域だけではありませんから、水を飲むというのはどこかで危険と背中合わせなのです。そういう地域に行つて飲もうか飲むまいか迷つて鼻を近づけたとき、塩素臭がするとホツとします」

ヨーロッパには蛇口から出る段階で塩素が残らない程度に量を抑えてある国もあり、それは国ごとの考え方であるという。しかし、発展途上国などでは危険を伴うこともあり、水と接するときにはボトルドウォーターを選ぶようにしてほしい、と言う。

「重金属などは続けて飲まなければ、たいがい平気。でも大腸菌やアメーバによる下痢などは命にかかわることもあります。生水には注意しなければなりません」

安全な水を豊富に使うことが許される日本。その上、味にこだわることができるのは、とても幸せなことだ。しかし、その味も安全性も、良質な原水が手に入つてかなえられることだ。名古屋の水道水が実際においしいという理由を忘れずに、これから水の生活意識調査の10点満点評価で高得点記録を伸ばしてほしいものだ。



変化する川 自由な川が美しい

真の清流は、地域の文化や風景があってこそ

川が本来有している自然の営みや、地域住民の生活、歴史、文化にも配慮した「多自然川づくり」が、少しずつ進んでいる。「20年以上この活動をしてきて、いい事例も増えてきた。農村部だけでなく、都会でも里川づくりが可能なんです」国土交通省の技官時代から多自然川づくりに携わっている島谷さんが、多自然川づくりの課題と希望を語ってくれた。



島谷 幸宏

しまたに ゆきひろ
九州大学大学院教授

1955年生まれ。1980年九州大学大学院工学研究科修士課程修了。旧建設省入省後、建設省土木研究所にて河川研究に携わる。国土交通省土木研究所河川環境研究室長を経て現職。専門は河川工学、河川環境。主な著書に、『水辺空間の魅力と創造』（共著 鹿島出版会 1987）、『河川風景デザイン』（山海堂 1994）、『河川環境の保全と復元—多自然型川作りの実際』（鹿島出版会 2000）他。

「川に自由を！」

これが今の私のテーマです。4年前まで、私は国土交通省で「多自然型川づくり」に携わっていました。河川が持っている自然の営みや、流域に暮らす人の歴史や文化に配慮しながら河川環境をつくる、あるいは保全する活動です。

今は、九州大学で学生たちと一緒に自然の川に再生したり、よりよい河川環境や社会環境を考えたりしています。

つい先日、大学院1年の学生たちに、こんな質問をしました。「アトム」の町とトトロの町、どちらがいいと思う？」

大半の学生が選んだのは、「アトム」の町と「トトロの町」が共生する町でした。その理由は、こんな声に代表されています。

「両方好きだけど、トトロの町ではアトムの町をつくれぬ。でもアトムの町ならトトロの森もつくれるから」

要するに、文明が進んだアトムの町にトトロの町を内包するのがいい、という意見。

面白いでしょうか？

今の大学生は、小学校時代に「トトロの森」を映画『となりのトトロ』で見た世代なんです。トトロが住む自然が大好きだけど、アトムがいる文明社会も捨てきれない。だから「アトムとトトロを共存させる」という考え、なかなかいいよね。

私と同世代の人たちは、子供のころ「アトムの町」に憧れていたと思うんです。そして実際、その通りの工業社会になっていった。町って、その時代の若者が目指す姿になっていくんです。だから

「多様な生物や植物が共存する自然環境がいい」「川も自然の形に戻ったほうがいい」と思う若者が増えれば、きっとそういう姿になると思います。

現に、川の再生も少しずつ進んできました。その経緯や方法、具体例を紹介しながら、日本の川の未来について話を進めていきたいと思えます。

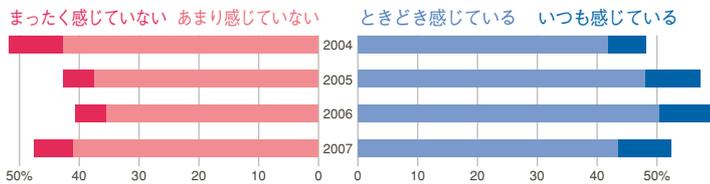
型を取って多自然川づくり

国土交通省のモデル事業として「多自然型川づくり」が始まったのは、1990年のことでした。

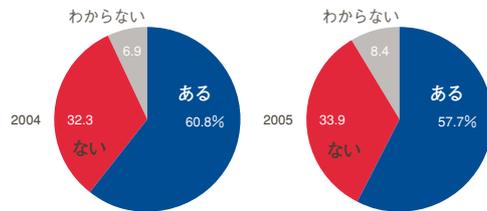
戦後からここに至るまで、川づくりでまず取り組んだのは、工業化による公害で汚れた川の「水質改善」です。1970年ごろになると「親水」という考えが登場し、次いで「景観」、「自然」とキーワードが移ってきました。

水害を防止する対策を講じながら、川を自然な形に戻そうという動きが出てきたわけです。中心になって活動したのは、技術者でもあった関正和さんです。関さんは1994年に他界されたんですが、生前こう言っていた。

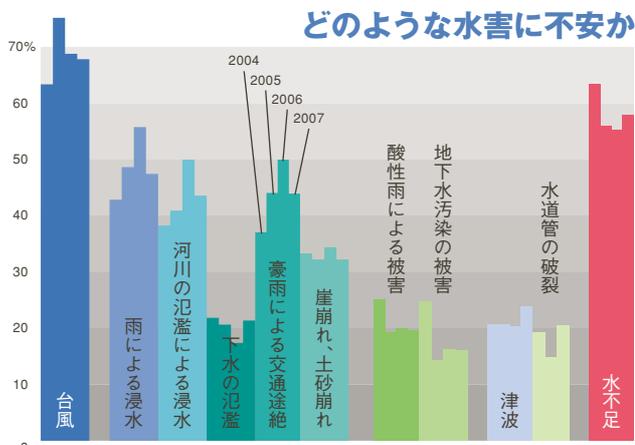
「日本には多様な川があるから、その川の個性を生かした川づくりをしたい。多様な自然、多様な生物がいるから『多自然川』なんだ」



水害の不安



身近に感じる川はあるか



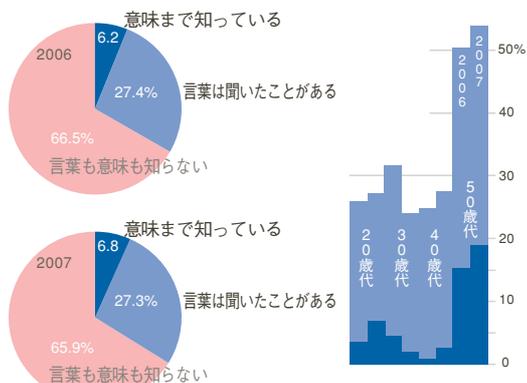
どのような水害に不安か



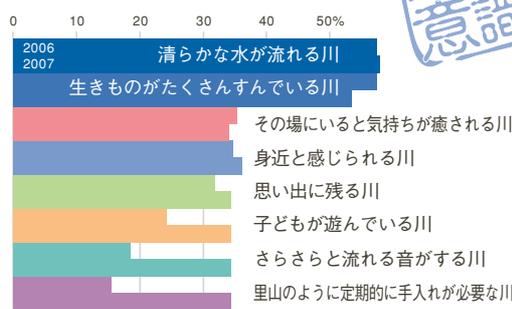
身近に感じる川はどんな川か



身近に感じる川をどのように利用するか



里川を知っているか



里川のイメージ



90年代の初めは「規格」通りの川づくりが主流でしたから、関さんの考えは異端でもありました。「日本の川は洪水時の水量が多く、河床勾配もきつい。植物育成のす

「お前たち、もうちよつと頑張れ。土木屋はものを残してなんぼや。お前たちの息子に誇れるような川づくりをしてみようよ！」

熱いんですよ、おじさん世代が。私はもう国土交通省を離れていますが、河川局でつくっている多自然川づくりの研究会で座長をしているので、頑張っている人たちにたくさん会えるんです。

先日は、埼玉県の土木課の人が、

「多自然川づくり」は名称から「型」の文字を削り、「多自然川づくり」となっている。日本人は「型」がついていると、日本人はついモデルケース通りにマニュアル化しがちなので取り外したのです。

多自然川づくりのスタート時に若者だった人々は、今50代になって次世代に発破をかけてます。この前、岩手県の技術者の方が部下を連れて私を訪ねてきたんですが、その場で部下たちにこう言うんです。

「お前たち、もうちよつと頑張れ。土木屋はものを残してなんぼや。お前たちの息子に誇れるような川づくりをしてみようよ！」

この前の洪水で被害が出たから、今度はこうしよう」という考えで川を改修していました。防災ではなく、減災のための知恵と技術があったんです。

現在の多自然川づくりも、防災から減災へ重きを置くようになったので、昔の人の知恵や技術を掘り起こすことも大事な作業になっています。古来の技術はだいぶ失われていますが、それを発掘して、これからの川づくりに活かすこと

が、今の課題ですね。

やればできる！

多自然川づくりの実例として、宮崎県の高千穂にある山附川やまつきを紹介しましょう。

この川は昨年大きな水害に見舞われ、私は国土交通省から派遣された「災害アドバイザー」として、川の復旧・改修に参加しました。災害アドバイザー制度は、河川改修にあまり予算がとれないけれど、被災地の復旧事業だけはきっちりしようということで一昨年できたんです。

大きな水害が起きるのは、平均して年に7、8カ所ぐらいでしょうか。その現場に出かけて、地元きよのの河川技術者の人や川好きな人と議論しながら提案していくのがアドバイザーの役割です。

山附川では、まず上流から下流まで全部歩いて、インスタント写真を撮りながら、改修後の全体像を考えていきました。今までの河川改修は、「川の上流の流れを速め、水を速く下流に流す」という発想だったんですが、それが下流域に洪水を発生させる結果につながっていた。

そこで発想を逆にして、上流を広げ、流れをゆったりさせることにしました。洪水で川が広がった



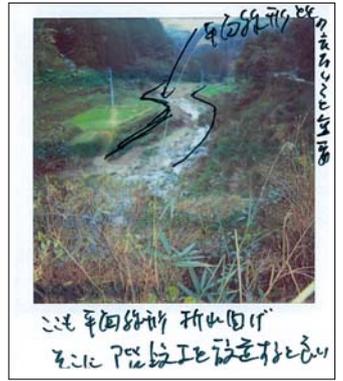
上：改修後の霞ヶ浦。
下：ヒントを与えてくれた中国の巢湖（チャオフー）



青森県の木野部（きのつぐ）海岸。



（このページの写真提供：島谷幸宏）



ということも、もともとこの川が広がろうとしていた、と考えて、こんなアドバイザーをしたんです。「最上流部の広い空間と樹林は残したほうがいい」

「川の中にある巨石は取り除かず、自然にできた落差を残すほうがいい。必要に応じて根巻（大きな石を護岸で取巻くこと）で補強しなさい」

「護岸線は直線に変えず、柔らかな味のある曲線的施工にする。植物が植生しやすいよう、深目地で施工し、周辺環境に馴染ませなさい」

「低い土地にある田んぼは、維持するのが大変だから、その土地を買って川を広げたほうがいいのでは」

私のアドバイザーは、現在の川状況を尊重して安全性を高めることに加え、地域の人が慣れ親しんでいた風景を極力残すためのものです。でも、失礼ながら本音を言えば、「提案の半分でも実現できればいいかな。それでも充分いい川になるだろう」と思っていました。

ところが驚いたことに、私のアドバイザーを全部受け入れて、改修が進んでいるんです。石積みの護岸も、土を詰めてコンクリートが見えないよう工夫している。さすが神話の里・高千穂だな、と思いましたね。

実はこの川、最初はがちがちに

護岸を固める方針が示されていたんです。でも改修に関わる技術者の人たちは、私の提案を聞いて「面白い」と思ってくれたんじゃないかな。

次に大きな洪水に見舞われたときにならぬか、その検証はまだ先のことですが、「減災を考えた里川づくりは可能だ」という感触は得ています。実際に災害が起きた川だけでなく、こうした改修を全国規模で展開できたらいいですね。

イメージは良い実例

河川だけでなく、海岸でも新しい試みが始まっています。私自身感動したのが青森県きのつぐの木野部海岸の事例。この地方の伝統的防波工法である「置磯工おきいそこう」を復活させました。自然の石を沖にたくさん置いて、海岸浸食を防ぐ仕組みを使って、海岸の景観を守りながら防災を実現したんです。

これまでの防波対策は、コンクリートの波消しブロックを置くのが普通だったでしょ。でも、昔ながらの置磯工のほうが、ずっと美しい。この海岸改修は、今年度の土木学会デザイン賞に輝きました。こういう素敵な例ができるよ、「あ、こういう方法もありなんだ。試してみよう」という地域が増え



神奈川県瀬谷区のと泉川の改修は2005年の土木学会デザイン賞に輝いた。川に平行して設けられた遊水池は、変化をつけた、なだらかスロープになっている。
 今年の9月6日、台風9号が関東地方を直撃したとき、和泉川の水位も150cmを超えた。太い角材でつくられた木橋も水に洗われたようだ。「もう1日降ったらわからなかったけど、ぜんぜん心配なかったよ」とは川沿い住人の声。



和泉川の川辺に立つ水位計には、泥水の水位の痕が残っていた。周りのブッシュもなぎ倒されて元気がない。
 この整った空間を維持するには、春から夏にかけて2～3回の草刈りが必要だろう。

下は、島谷さんが吉村さんと視察に出かけた和泉川の風景。20年以上前のこの状態から現在を想像できる吉村さんはすごい人だ。(写真提供：島谷幸宏)



ると思います。逆に言うと、人間の想像力って意外と貧困だから、実際に良い事例を見ないと、イメージが湧かないんですよ。
 私自身もそう。以前、霞ヶ浦の湖岸帯再生プロジェクトに工学者としてかかわった体験があるんですが、初めはノーアイデアでした。現場行ってコンクリートの護岸を眺めても、改修後のイメージが浮かばない。霞ヶ浦の湖岸に自然が戻った姿を想像できなかったのです。そこで、中国の巢湖^{チャオハイ}を見学に行きました。

そうしたら、学生のころに教科書で見たような湖岸の風景が、目の前に広がっていたんです。岸边には柳の木、その内側には蒲や水草の地帯が1km以上続いていて、水辺には水牛もいる。
 「ああ、これが湖の自然な姿だったんだ」と感動したとたん、霞ヶ浦の課題点がわかったんです。
 霞ヶ浦も元は緩やかな湖岸だったのに、湖にせり出す形に道路がつくられていたため、その下を波が深く削ってしまっていた。そこを改修すればいいんだ、と思ったんです。
 でも、道路自体をなくすことはできなかったため、道路から水際までを、なだらかな勾配に改修しました。

ちなみに理想的な勾配の角度は、粒径の大きさによって変わってきます。土の粒が粗ければ、多少急勾配でも、湖岸を維持できる。それを計算して実行したんです。
 これと同じような改修は、スイスのポーテン湖などでも行なわれていました。そのことは私も知っていました。
 「島谷さん、この川は20年後にすていたし、写真では見ていたんですが、自分の目で理想形を見ないとなかなか想像できないものなんです。」
 都市の川も変わるんだ
 次は多自然川に戻って、神奈川県横浜市の住宅街を流れている、和泉川の事例をお話します。
 多自然川づくりを開始して以来、農村地帯なら実現できる手ごたえは感じていましたが、「都会の川でもできるんだ」という好例が和泉川です。
 これを実現させた中心人物は、横浜市の職員だった吉村伸一さん。今から20年ほど前、国土交通省に勤めていた私は、吉村さんと一緒に和泉川の視察に行きました。

「ごくよくなりますよ」

吉村さんにそう言われたとき、私は半信半疑でした。

「へっ？ コンクリートでがつしり護岸されたこの川を、どうやって再生するんだろう？」

そう思ったのですが、吉村さんたちは見事にやってのけたんです。しかも、やり方もすごかった。『横浜市民の森条例』を制定し、和泉川流域の土地を徐々に買い上げて、豊かな自然が楽しめる川にしたんです。

その労力もさることながら、吉村さんの想像力にも感服します。自然の姿からはほど遠い形になっていた川を見ただけで、理想的な姿をイメージできたんですから。

吉村さんの試みを踏襲すれば、東京にも里川はできます。可能性が大きいのは神田川です。

この前、災害アドバイザーの仕事で、神田川流域を隈なく歩きました。

現状では排水溝のようにコンクリートで固めてあるので、自然な川にするには5倍ぐらい川を広げる必要があるけれど、いい川ができると思う。

「東京には土地がない」と言っている人がいるかもしれないけれど、土地はあるんです。あの川の周辺って公園がいっぱいあるじゃないですか。それを利用して、

川を蛇行させるといい。

今、東京都は水辺と公園を別々に整備していますが、一緒に改修すれば和泉川のような川ができると思います。神田川の上流にある井の頭公園や善福寺公園には、湧水があるんです。元来、水はすこくきれいな川だから、戻せると思っています。

もともと戦災復興時には、神田川沿岸を緑地にする計画だったし、御茶ノ水辺りにはその名残があります。今からだって、都民が本来に望めば、絶対できるはずですよ。

変化する川が美しい

「美しい川」と言われてイメージする川の姿は、人によって違うことでしょう。私がつくりたいと思っている「美しい川」は、「変化する川」です。最初に言った「自由」ともつながるんですが、自然環境に即して自由に変る川の姿こそ美しい、と思っています。

九州大学の学生たちが、九州大学の樋口先生と、そんな川づくりの楽しさを体験しました。福岡の遠賀川からコンクリート護岸を撤去し、微妙な起伏をつけて美しい水際を形づくったのです。しばらくすると水際の芝生が削れたり、泥が溜まったりしてくるので、地元の人には心配してこう言うわけ。

五ヶ瀬川の改修 デザインの考え方 (写真提供：島谷幸宏)

1. 高水敷面（河川敷のうち、洪水時に水が流れる部分）の侵食は考えられないので、できるだけ水面に近い高さに高水敷を設定する。また河岸域のスロープも緩やかにし、安全に水辺に近づけるようにする
2. 感潮域であるので、潮間帯をゆるやかなスロープで形成し、満潮時に斜面と水位がぎりぎりのラインとなるように設定する
3. 出初式が行なわれる空間の護岸前面は、消防水利が確保できるように掘削し水深を確保する
4. 消防水利を確保する場所とその他の場所で河岸形状が異なるので、景観上の区切りで水制（河岸から河川に突き出して、流水を制御する工作物）を配置する
5. 水制を配置することで河岸の侵食、堆積、水の流れなどが多様になることを念頭に置く
6. 自然な河岸は変形することを前提とする
7. 流れ灌頂（ながれかんじょう：精霊流しと同様の祭礼）で水辺にアクセスする部分は木製のスロープとする
8. 水際の護岸は、段を形成し座れるようにする



改修前



改修後



「先生、一生懸命つくった川が変わっちゃってる」

私の答えはこれです。

「やっと川が自由になれたってことなんだ。自分で変われるようになったことが素晴らしいんだよ。自由になれることが美しいんじゃない？」

こう言うと、住民も安心してくれます。かつての炭鉱地帯を流れる遠賀川は、一時期水も真っ黒に汚れていたんですが、それが甦って鳥も戻ってきました。住民の人たちも参加して、ここまで変えられたんです。

自然の川辺の楽しみは、何といっても散歩につきますよね。アンケートの結果にもそれが表れているし、私たちが行なった現地調査でも、朝夕、川辺を歩いている年配者がすごく多かった。

「あの花がまた咲いたね」とか、「夏が過ぎてハゼ釣りの人が増えたね」とか言いながら、季節の移り変わりを楽しめるのが日本のいいところですね。

でも日本人で、川そのものの変化は好まない。ものの形が変わるのは気持ち悪いんですね。でも、本当は川も変化していくのが自然。これから「変化する川が美しい」という美意識を、もっと広げていくのも私の役目ですね。

一緒に川づくりをした学生たち

大東京、水辺空間の変遷

法政大学ボアソナードタワーから、東京・飯田橋駅前、中央線に沿った外堀を見下ろす。
左：東京の下町を夕暮れどきに出航した屋形船がレインボーブリッジをくぐるころには、残っていた日差しもすっかり暮れている。

身近な都市の水辺に 夕暮れ文化を

「都市における水辺の重要性」を一貫して訴えている陣内秀信さんに、変遷の背景と未来の水辺のあり方をうかがった。陣内さんが提唱するのは、水辺でゆったり過ごす「夕暮れ文化」。そこには水辺の理想的環境ばかりではなく、私たちの暮らし方への示唆も含まれているようだ。

変遷を重ねた東京の水辺

東京の水辺は、ここ30年間で何段階も変遷を重ねてきました。

東京に限らず、60年代の工業化で壊され、汚された水辺と緑を取り戻そう、という動きが全国的に始まったのが70年代でした。

まず小樽、柳川の環境復活が行なわれ、東京でも「隅田川からきれいにしていこう」という活動が始まった。川の水質を改善し、屋形船や花火が復活したのもこの時代です。

80年代に入ると、川での動きがベイエリアにも広がりました。美濃部亮吉都政時代（1967〜1979年3期在任）から東京湾の開発を抑制し、海浜公園を整備していたお台場が、人気スポットになったのです。ウインドサーフィンのメッカにもなり、ベイエリアがトレンドイナ場所になってきた。この時代のお台場の光景は、とてもチャーミングでした。お台場から眺めると、高い建造物は東京タワーと、浜松町の貿易センタービル、東芝ビルぐらい。品川埠頭には通称キリンと呼ばれるクレールが立ち並び、そこに西日が当たると、何とも言えないシチュールな眺め。60年代型工業社会の残照を見ているような感じでした。

当時のベイエリアは、埋め立て地につくられた工場や流通施設が次々空洞化していた時代です。

中央区など都心に目を移すと、夜間人口が急速に減っていた。高度成長期時代の影響で、住居も工場も大学も、こぞって郊外へ追いやられた時期だったのです。

あまりに都心人口が減ってしまったため、東京都と中央区は、ここでプロジェクトを立ち上げます。これが、隅田川河口で展開した大川端大作戦。「都心に人を戻そう」と、ベイエリアの工場跡地などにマンションをつくり始めたんです。

典型的な建物が、石川島播磨造船所の跡地に建設されたリバーシティ21。その周辺にもマンションが建設され、水辺の生活も再び活気づいてきました。

お台場人気を第一ラウンド、大川端大作戦を第二ラウンドとするのと、第三ラウンドはロフト文化の誕生です。

すでにこのころ、船による貨物輸送から陸上輸送が主流になり、無用になった倉庫が数多く残されていました。その倉庫がレストラやギャラリー、ライブハウス、ディスコ、イベントスペースとして活用され始めたのが、80年代前半。これが、いわゆるウォーターフロントブームにつながるわけです。

水辺をきれいにして自然が回復し、住宅の供給でも都心に戻り、ウォーターフロントの賑わいで町が活気づいた。ここまで、ポジティブな要素が3つ重なりました。

ちよつと立ち止まった時代

今考えると、80年代前半は非常に面白い時期でした。でもそれは突然始まったことではなく、70年代からさまざまな分野の人たちが仕込みをしてきた結果なんです。一つ例を挙げると、奥野健男さんの『文学における原風景』（集英社1972）という本がきっかけになって、町や文化、歴史に対する関心が高まってきた。従来の学問では飽き足らない研究者たちが、東京をそれぞれの分野から見直したわけなんです。

建築分野でいえば、楳文彦さんが「奥の思想」を唱えたり、芦原義信さんの『街並みの美学』（岩波書店1979）、川添登さんの『東京の原風景』（日本放送出版協会1979）などの本が出版されました。都市の歴史を研究している鈴木理生さんの『江戸の川、東京の川』（日本放送出版協会1978）もこのころ出版されて、「東京は面白いよ」という流れが徐々に広がっていったんです。70年代後半から80年代に入るこ



陣内 秀信

じんないひでのぶ

建築史家 法政大学デザイン工学部建築学科教授

1947年福岡県生まれ。1973～1975年イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学に、翌年ユネスコのローマ・センターに留学。帰国後、1983年東京大学大学院工学系研究課博士課程修了。東京大学工学部助手・法政大学工学部建築学科助教授を経て現職。主な研究領域は、イタリア建築・都市史。ヴェネツィアとの比較から江戸や戦前の東京が水の都であったことを論じた、『東京の空間人類学』（筑摩書房 1985）でサントリー学芸賞（社会・風俗部門）を受賞。

主な著書に『都市を読む-イタリア』（法政大学出版局 1988）『ヴェネツィア-水上の迷宮都市』（講談社 1992）『地中海世界の都市と住居』（山川出版社 2007）他。

ろが、ちょうど過渡期でしょうね。経済的に停滞感があって、都市の性格づけが難しかった時期でもあります。未来志向一辺倒ではなく、もう一度町のあり方や文化を振り返ってみようという空気が漂っていた。

そこで出てきたのが「廃墟」です。廃墟を題材にした写真や劇画が話題になったり、建築分野でも磯崎新さんが廃墟に着目していました。その視線の先にあった場所が、時の蓄積や沈殿を感じさせる廃工場や廃倉庫だったわけです。

こうした建物が、ギャラリーやショールームとして次々生まれ変わったのが80年代の初め。これがロフト文化の始まりです。ひととき活気があったのは、芝浦の運河沿い。レストランやギャラリー、デイスコがオープンしていきました。

このころ、若い人たちの嗜好や行動にも変化が見られました。モボ・モガやオールデコが再評価されたり、「町歩き」がトレンドになってきた。新宿型の盛り場から原宿、渋谷、あるいは代官山に興味に移り、ファッショナブルに町を歩くようになったわけです。

その延長線上で、若者がウォーターフロントを発見したのが80年代前半だと思います。メディアも「水辺の可能性」「ビジネスチャンスの場」の両面で、ウォーターフ

ロントを盛んに取り挙げるようになりました。

熱かったですね、あのころのウォーターフロントは。僕自身、廃倉庫やだるま船が並ぶ運河が少しづつ形を変え、光り輝いていく様子を見ながら、わくわくしたものです。

当時のベイエリアの魅力は、異次元感覚が味わえたことだと思えます。特に夜がいい。たとえば田町駅から海辺まで歩いていくと、真つ暗な闇が広がっているんです。そこにきらきらと照明が反射すると、非日常性を体感できた。

橋もまたいいんです。当時もつとも話題を集めたインクステイツク芝浦ファクトリーは、橋を2つ越えた場所にあつて、直接水に面していました。元は倉庫ですから、土木的なプロムナードはなく、水との関係がダイレクト。一歩間違えば水に落ちるかもしれないけれど、それも魅力の一つ。管理されていない素朴な空間だからよかったです。

「ベイエリアはこうあるべき」

あのころ、僕は研究者の立場からそんな発言をしながら、一人のユーザーとしてウォーターフロントを満喫していました。でも、そんな時代は、あまり長く続きませんでした。

水辺もバブルに躍らされ

80年代も半ばになると、東京は高度情報化社会を迎え、ベイエリアの状況はまた変化します。「世界を代表する金融都市」などと呼ばれて、大掛かりな開発が始まりました。東京湾周辺で50件は下らないプロジェクトが発表された記憶があります。86年から88年にかけては、インテリジェントビルという、今思うと恥ずかしい名称のビルが乱立しました。後に振り返ると、これがバブル経済時代の始まりだったわけです。

実は、時代の流れにいち早く対応したのは、横浜や幕張でした。横浜には「みなとみらい21」、幕張には「幕張メッセ」ができ、東京はそこに割り込む形でオフィスビルを集積させたテレポータウン（臨海副都心）構想を立ち上げました。当時の鈴木俊一都知事（1979～1995年4期在任）は、そこで都市博を開催しようとする目論んでいましたが、それに反対する青島幸男都知事（1995～1999年1期在任）の登場とバブル経済の崩壊で、テレポータウン構想自体が凍結してしまつた。

結局、86年ごろから91年ごろまでのバブル期に実現した水辺の開

発は、浜松町のシーバンスと品川の天王洲アイルぐらいのもの。シーバンスの開発は昭和初期の石垣を残し、天王洲アイルも一度解体した石垣を一部復元する形で行なわれました。その意味ではよかつたのですが、この開発を期に、ウォーターフロントを盛り立てていた若者やクリエイターの情熱は、潮が引くように冷めていったのです。

80年代前半に栄えたロフト文化は、小規模な資本や斬新なアイデアに支えられていました。ところがバブル期に入ると、開発が大規模になり、若者の文化やクリエイティブなものは入り込む余地がなくなってしまう。

90年代も、この状況は同じでした。バブルは崩壊したものの、政府のてこ入れで、大規模開発が進められました。「特区」として「都市再生」の大義名分をもらい、高層のオフィスビルが新設されていきました。

ただし、新しいオフィスビルが建てられたのは、汐留、丸の内、六本木など、どれもやや内陸部。足の便の悪さから、「臨海部にはオフィスは向かない」と考えられたからです。ちなみに汐留は海に近い立地ですが、水がまったくないと意識されていません。

この時代にも、もちろんベイエ

リアの大切さにこだわっている人々はいましたが、一般的にベイエリアへの関心は、ますます薄れた時期だと思えます。

水辺の再評価と居住地区化

人々の関心が再びベイエリアに向くようになったのは、21世紀を迎えてからでした。それまでの風向きががらりと変わって、ベイエリアに超高層マンションが建ち始めたのです。

80年代に住居や大学が郊外へと追いやられた流れが逆転し、「都心回帰」の動きが急速に強まってきたのです。

時代の気分を表わすキーワードとしては、「成熟社会」「コンパクトシティ」といったところでしょう。か。ともかく、都心は「刺激的」で「魅力的」だと、再評価されてきた。その流れの中で、臨海部の価値ももう一度上がったわけです。ただし、この動きを手放しで喜ぶわけにはいきません。

だいたい、これほどダイナミックに都市構造を変えている国なんて、先進国では日本だけ。欧米の都市は、18世紀から19世紀にかけて、中心部にしつかりした中層建物ができています。マンハッタンにしても、ところどころに超高層の建物はあられるけれど、中層の建物

とのバランスを考えて建てられている。歴史や元の風景に関係なく既存の建物を壊し、新しい建物を建てているのは東京しかありません。言い換えると東京は、長期的な都市計画もビジョンがないまま、市場原理だけで形を変えているんです。

2000年以降、ベイエリアに建設された超高層マンションは、お金のあるエリートしか住みません。しかも、ベイエリアにありながら、水との距離はそう近くない。部屋からの眺望は素晴らしいかもしれないけれど、水辺まで出て楽しむ環境になっていないんです。

超高層マンションを建てただけでは、文化は生まれません。マンションを出たら水際までの散歩道や船着場があって、周囲にはレストランやバーなど商業施設もほど

よく配置されていないと、本当の意味でのベイエリア開発にはならないと思います。

80年代前半と現在のベイエリアの大きな違いは、「わくわく感」でしょう。さきほど言ったように、80年代前半のベイエリアには、非日常的な刺激がありました。水辺を間近に体感する面白さがあったんです。それを仕掛けていたのは、小規模資本でした。

ところが、大規模資本による超高層マンションが立ち並ぶ現在の水辺からは、わくわくする気持ちが生まれてこない。ベイエリアに居住人口が増えたこと自体は、いいと思います。でも、それならもつと水辺の日常を楽しむゆとりがほしい。現状では、開発が大規模過ぎて、かえって水辺が遠くなっているように感じます。ここが今

のベイエリアの問題ですね。

失われた「身近な」水辺

2003年になると、東京都が「運河ルネッサンス」を提唱しました。民間から発案される水辺のサロンやレストラン設置に対し、水域占領許可規制を緩和して、水辺の文化や価値を高めていこう、という試みです。まずは芝浦、品川、つづいて月島、晴海とエリアを限定して、モデル地区づくりが始まっています。

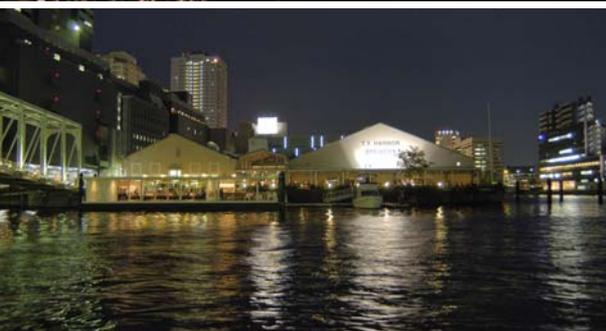
とは言っても、船着場の設置などの認可は、大企業による巨大プロジェクトにしか下りにくいのが現状のようです。

80年代前半に誕生した小規模な商業施設は、ほとんど潰れてしまいました。地価の高騰だけではなく、不法占拠という理由で立ち退き命令を受けたヨットクラブなどもあります。確かに行政側から見れば、不法占拠だったのでしよう。

でも、従来は、水域占領に対しても、悪いことさえしていなければ見逃してくれる大らかさがあったはず。バブル以降は厳しくなって、市民が長年親しんできた水辺の施設を潰してしまっている。ただ、逆に考えれば、市民の側にも「もつとベイエリアを楽しみたい」という、強い意志やゆとり



東京初のフローティング・レストラン&バー、天王洲のTYハーバー。



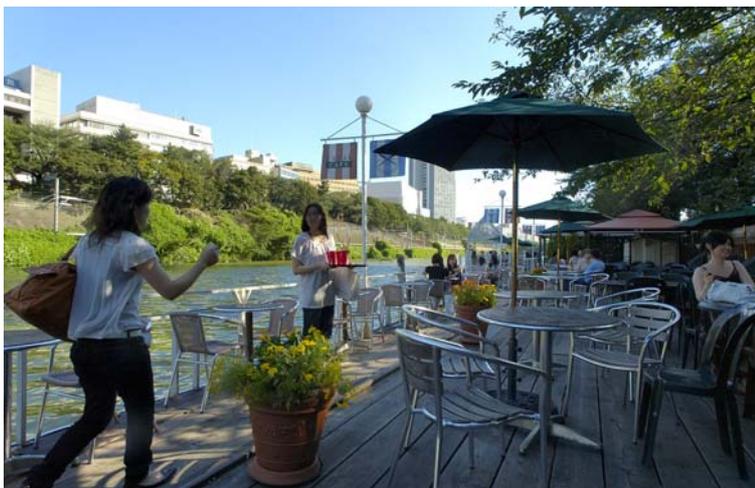
が必要だったのかもしれない。都市在住の人を対象に行なったこの水の意識調査の結果を見て、「好きな水辺」として選ばれるのは、海の砂浜、溪流、温泉など、遠くの自然ばかり。すぐ身近にある水辺を楽しむ、ということも忘れていいようです。江戸時代には町の中や川端、海辺に人気スポットがたくさんあって、地域の中で楽しんでいたのに。

でも、今からだって望めばその可能性はあると思います。現にここ数年間で、ボジティブな動きも出てきました。大規模開発が進む一方で、市民が水辺に親しむ空間も着実に広がっています。

たとえば天王洲のTYハーバー。倉庫スペースを利用した、運河沿いのレストランで、ボートも接岸できるつくりです。ここが今、新しい水辺のスポットとして、話題になっています。TYハーバーの前にも、東京で初めてのフロートイングリレストラン&バーが今年オープンしました。

夕暮れ文化を生活空間に

もう一つ、飯田橋のお堀沿いにあるカナルカフェも、人気を集めています。ここは1918年に創業した貸しボート屋が母体。その後、後に東京市長となる後藤新平さん



飯田橋駅そばの外堀に浮かぶ、カナルカフェ。都心にあるため、仕事帰りの普通の人たちが、気軽に訪れ、水面と川風を楽しんでいる。日本には少ない「水辺に面した飲食」を、洒落た形で提供してくれる、まさに都会のオアシスだ。

のサポートで開業した由緒正しい施設です。今も貸しボートはありますが、お堀の周囲でレストランとカフェを営業している。特にオープンテラスのカフェは、すぐそばに水があつて、非常に気持ちの良い空間です。僕や学生たちもよく利用しますし、水上ジャズコンサートへの企画にもかかわっています。

カナルカフェは外国人のお客さんも多く、日本人にも評価する人が大勢いる。水辺を享受したい、という感覚は、世界共通なんですよ。

イスタンブールには漁師さんが自分で獲ってきた魚を自分で揚げて売っている店がありました。マルセイユの古い港でも、漁師さんが自ら魚を売っていた。そこまではいかににしても、東京の水辺にも人間が元気に息づいている空間がもつとあればいい、と思います。

こういう思いを抱いているのは、僕だけじゃないはず。だから何でも行政任せにしないで、声を上げていくことが必要だと思う。ベイエリアでお店を開く人には、「店の前の敷地にボートを係留したい」と、どんどん申請を出して遊びに行きたい」と訴えたいですね。ベイエリアの超高層マンシ

ョンに住んでいる人たちにも、もっと水辺を楽しむためのアイデアを出してもらえたらいいと思います。

広島には、国土交通省の応援で、太田川沿いにオープンテラスのカフェができました。常設の建物も許可されたそうです。東京も、夕暮れどきに散歩や食前酒を楽しむスペースが増えたらどんなにいいでしょう。

イタリヤなど地中海沿いの町で、一番の幸せを感じるの夕暮れどきなんです。夕日を浴びながら一人で、あるいは友だちや恋人とゆったり時間を過ごす。それにもっともマッチする空間は、間違いなく水辺なんです。

地中海沿岸だけじゃなく、東京にだって、かつては夕暮れ文化がありました。福岡の中州や大阪の道頓堀、京都の加茂川沿いの一部には、今も夕暮れ文化があると思います。夕暮れを楽しむゆとりを、東京にも取り戻したい。

TYハーバーやカナルカフェをいち早く発見した若者に遅れをとらず、80年代にウォーターフロント文化を楽しんだ世代も、ベイエリアを歩いてくれるといいですね。巨大プロジェクトの隙間に夕暮れ文化を育てていけば、ベイエリアの可能性も広がると思います。



海からのラブレター

〈牡蠣の森を慕う会〉20周年に向けて

1989年（平成元）に始まった〈牡蠣の森を慕う会〉の植林活動が、来年20年目を迎える。

全長25kmの大川が太平洋に注ぐ気仙沼湾で

「海にとっても山が大事」

と訴えてきた畠山重篤さんは、

牡蠣や帆立の養殖といった漁業と運動を両立させてきた。

「森は海の恋人」

というインパクトのあるキャッチフレーズにも助けられて周知が進み、

運動は多方面から注目されるまでに成長してきた。

この運動をきっかけに、地元ではどのような活動が展開しているのか。

そんな興味を抱いて気仙沼を訪れた。



川でつながる海辺と山の手

小学校の社会科の時間に習ったりアス式海岸。複雑に入り組んだ海岸線を目の前にして、「三陸にはリアス式海岸が広がる」という言葉の意味を改めて実感させられる。

畠山重篤さんは三陸リアス式海岸で牡蠣の養殖業を営んでいる。森が海に与える影響の大きさに気づいて1989年（平成元）〈牡蠣の森を慕う会〉を結成。気仙沼湾に注ぐ大川の上流に広葉樹の植林を始めた。



畠山重篤さん

「牡蠣の森を慕う会」と聞いてピンとこなかった人も「森は海の恋人」運動、そして代表を務める畠山重篤さんの名前だったら、すぐに思い浮かべることができるかもしれない。

植林のきっかけは、牡蠣が真っ赤に染まるほどの赤潮の発生だった。畠山さんは当時のことを、こう振り返る。

「赤潮は昭和40年代（1965）から始まった。ちょうど東京オリンピックが行なわれた時期から頻繁に起きるようになったんです。当時は、のどかな田舎でもそんな状態。赤く染まった牡蠣は売り物にならなかつ

たから、みんな困り果てました」そんなことになる以前、海は地元の人たちから「太平洋銀行」と呼ばれていた。

畠山さんの著作『リアスの海辺から』（文藝春秋 1999）を読むと、畠山さんの子供時代にあたる昭和20～30年代までは、海は実に豊穡だったことがわかる。

「海の幸が無尽蔵に採れたから、太平洋銀行。それが化学肥料や農薬、汚れた家庭排水が川からどんどん流れ込むようになって。つまり赤潮の原因は陸側からくるんです。移動する術を持たない牡蠣は、逃げ場がないので害をもちに受けたんですね」

廃業して陸に上がる人も増える中、畠山さんは川が運んでくる水の上流に目をつけた。

「小さいときから生き物と暮らしてきた。海の生き物は当然として、山や川にも生き物がたくさんいて、そういう中で育ってきたんです」

従来から、海辺の漁民と山の手の農家が婚姻関係を結ぶことは多かった。実際、畠山さんのお母さんも農家からお嫁入りしている。木材や竹など山の材料は、竿や養殖筏、造船には欠かせないし、蠣殻を畑の肥料にするなど、海と山は日常的につながっている。麻ロープなどが普及する前は、山ぶどうの蔓を使っていたそうで、舟喰虫がつかない丈夫な綱だったという。

畠山さんはまた、汽水域が豊かな生態系を育むことにも気づいていた。塩水だけではダメで、川の水と混じ

り合うことでプランクトンが豊富な魚や貝が育ちやすい海域になるのである。

「ところがその川が汚染物質を運んでくるようになってしまった。海だけではなく、田んぼに行くとしんとしていて異様だった。昔は蛙や虫がうるさいほど鳴いていたのに。」

だから植林を思いついたのも、山に木を何本植えれば水質がどれくらいきれいになる、というのではなく、『人間の意識をどう変えるか』ということが最大の目標だったんですよ」

除草剤は海苔の養殖にも打撃を与えた。かつては雪解け水が海苔の成長を促していたが、赤潮が発生した時期を同じくして、川水が増えるとすくすく育った海苔が一晩で消えてしまうこともあったという。

〈牡蠣の森を慕う会〉の誕生

「森は海の恋人」は〈牡蠣の森を慕う会〉の活動のキャッチフレーズ。歌人の熊谷龍子さんが考えてくれた。「熊谷さんは、先祖伝来の森を守って暮らしている人。夫の博之さんが大川の上流に建設予定だったダム反対の運動を進めていて、〈牡蠣の森を慕う会〉と同じ方向性だったためにいろいろ協力してくれました」

最初に畠山さんが考えたのは『ワカメも力キも森の恵み』というキャッチフレーズ。そのものズバリだけど、色気がないと仲間と言われた。そこで龍子さんが考えてくれたのが「森は海の恋人」。一度聞いたら忘れ



られないキャッチフレーズとして、全国に知られていった。

「川の水は資源だから人間が使い切つて海に捨てる、という発想がまかり通つた悲しい時期があつたんです」という畠山さん。川の水は生物を育んだり、地下水を浄化して涵養したり、というさまざまな働きをする。その多様な価値を見ないで、「水資源」という単一な価値観だけに特化していったためだ。

山が針葉樹で埋め尽くされているのも同じこと。成長の速い針葉樹は広葉樹に比べて早く換金できるからと、戦後は雑木と呼ばれる広葉樹を伐つたり、杉や檜が続々と植林されていった。それ以前の赤松も、実は人間の都合で植えられることが多かった。太平洋戦争の末期、石油が不足して、赤松の根から油を取り出す工場が全国につくられたというのだ。松根を乾留させ、テレピン油やパイン油を抽出するために、赤松は重用されたのである。

しかし、龍子さんの祖父で気仙沼地方を代表する歌人、熊谷武雄さんは今から80年も前にこんな歌を詠んでいる。

手長野に木々はあれども
たらちねの ははそのかげは
抛るにしたしき

「手長山にはいろいろな木があるが、柞（柞やクヌギの古語）の林に入ると、お母さんのそばに来たようで心が休まるよなあ、という意味です。森は本来こうした精神的、環境的な恵みを持っていたのに、戦後は単なる『建材』としてとらえられ、成長

の速い杉や檜などの針葉樹に植え換えられて、生き物が棲めない場所になつてしまった。でも落葉広葉樹の森は、花が虫に蜜を与え、木ノ実が鳥や動物の餌になり、葉が落ちることで腐葉土をつくっていました。だから生態系が豊かだったんです」

日本の先人の知恵と同じことを、畠山さんはフランスで経験する。フランスのブルターニュの海辺に牡蠣養殖の視察に訪れたのだ。干潟にごめくカニや海老に、かつての宮城の海の姿があり、ロワール川上流の広葉樹の森に、杉山に変わる前の三陸の森の原風景があつた。

このときの体験がきっかけとなつて、畠山さんは森の重要性、特に落葉広葉樹の大切さに気づいていく。

熊谷武雄さんが歌に詠んだ、柞の森の復活を目指したともいえる。来年は（牡蠣の森を慕う会）結成から20年目。三陸の帆立貝養殖の先駆者でもある畠山さんのアイディアは留まることを知らない。パワフルに突き進んでいった20年間だった。

室根山が取り持つ海と山

（牡蠣の森を慕う会）は1989年（平成元）から、岩手県の室根山に落葉広葉樹の植林を開始。紀州熊野大社の熊野神分霊を勧請してから室根山と改称したが、かつては鬼首山と呼ばれ、坂上田村麻呂の鬼退治伝説も伝わっている。

植林地に室根山を選んだのは、この山が「山ばかり」だったから。「山ばかり」とは、海から目印にしている山を見て、山と山との重なり具合から、自分の位置を確認して進む方向を決めたことに由来する。目印になる山をこう呼び、「山あて」ともいわれる。

室根山は気仙沼の漁師にとつて、命を左右する大事な「山ばかり」だった。そのため古くから山岳信仰の対象として親しまれてきた上に、気仙沼方面の漁民の海上安全や大漁祈願の信仰対象ともなつてきた。閏年の翌年の旧暦9月19日に行なわれる特別大祭は、奥州三大荒祭りとしても有名である。

室根山での植樹祭で（牡蠣の森）に海から持つていった大漁旗がはためいたときには、

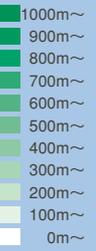
「緑の森に大漁旗が映えるなあ、思つたとおりだ」

と鳥肌が立つ思ひだったと畠山さんは言う。

一関市役所室根支所から程近い場所に、お仮宮と呼ばれる所がある。紀州熊野からの分霊が舟で唐桑に着き、陸路を運ばれたあと、このお仮宮で休んだことに由来する。特別大祭の神役は室根からだけではなく、唐桑や川崎からもやって来て潮水が奉納されるというから、やはり室根山と海との絆は深いのである。

加えて、大川は岩手県（室根）から端を発して宮城県（気仙沼）で太平洋に注ぐ川だが、本来、室根も気仙沼も同じ郡だった。

行政区を超えて一つの活動に取り組みするのは、現代社会において、さまざまな困難が伴うものだ。しかし、その境界線は、虫や魚や鳥にはもち



地図を見れば、気仙沼湾への分水嶺が県境ではなく室根町の境界線だということがよくわかる。左：安波山から見下ろした気仙沼湾。リアス式海岸であることが一目でわかる。湾内は、養殖筏でいっぱい。右：気仙沼湾の一番奥にある港には、北は北海道、南は九州からの漁船があふれていた。

ろん、私たちの目には見えないものだし、郡や流域としてとらえたら住民の精神的な一体感は案外掘り起こせるものなのかもしれない。

《牡蠣の森》は海の恋人

室根山の植林地は《牡蠣の森》と命名され、「森は海の恋人」運動の象徴である。その室根山を擁する一関市室根町（元・室根村）でお話をうかがった。

一関市役所室根支所産業経済課農林係の小野寺新吾さんは、植林運動の担当者になって9年目。スタート当初のことも調べて、山の手側の事情を話してくれた。



小野寺新吾さん

「当時の加藤^{ひろし}村長は崑山さんから『上流への感謝を込めて植林したい』と言われたそうです。上流、下流という流域圏内を考えたとき、当時の水質としてみたら、あまり良い関係でなかったかもしれません。だから加藤村長もボジティブな《牡蠣の森を募う会》からの申し出にいつそう共鳴して、室根山への植樹が実現したのだと思います」

小野寺さんはまた、この活動は《牡蠣の森を募う会》と有志団体（第1回、第2回、第4回は単独開催。

第3回は《むろね森と海を語ろう会》、第5回と第7回は《ひこばえの森分収林組合》、第6回は岩手県緑化推進委員会室根支部、第8回以降は第12区自治会との共催）の主催であり、行政としては用地とスタッフの提供に協力しているだけだという。あくまでも民間の主体的な活動で、それが19回続いてきたというのだ。

土地の提供も室根村としては第3回以降のこと。初回と2回目は室根神社が神社周辺の遊休地を提供している。土地利用に関する契約も、植林の許可を受けただけで特にかわしておらず、第5回が転機となった。第5回で植林地となったのは、岩手県の県行造林であった赤松林の跡地。

県行造林…県が民有林野（市町村有林野も含む）の土地所有者と分収契約を結び、造林を行なって、その収益を土地所有者と分収する制度。分収…「土地所有者」「造林または保育を行う者」「費用を負担する者」の2者または3者で契約を結び、伐採時に収益を一定の割合で分け合う制度を分収林制度という。

室根村と分収林組合の間で60年間の分収林契約が結ばれ、矢越山の1haの土地に1600本の檜、200本の山桜、200本の小楠の苗木が植えられた。

第6回にいったん室根山に戻ったものの、第7回以降は《ひこばえの森》と名づけた矢越山の県行造林跡地に植樹が続けられている。

初回から4回目までの植樹は30本から80本程度で、記念植樹的な意味合いが強かったという。それが5回目以降、一気に2000本植樹にな



右上：室根支所から見上げた室根山は、気仙沼湾からもよく見える。海から目印にする「山ばかり」でもあり、信仰の対象ともなっている。
右：水車のある集落づくり 構想で復元された水車小屋。
他：矢越山の ひこばえの森 で開催される植樹祭は年々参加者が増えている。(写真提供：一関市役所室根支所)



「良い木を育てるには、少し間伐しないといけない。そろそろ手入れをしていく時期に入っていますね」という小野寺さん。森林を熟知した人の力が生かされることで、活動のいっそうの拡がりが期待される。海の人からの働きかけが「牡蠣の森を募う会」からだったとすると、山の手側で中心となったのが、当時の室根村(現・一関市室根町)の第12区自治会である。第3回の植樹に参加した中から、「牡蠣の森を募う会」の活動に共感した人たちが現れたのだという。

「第12区自治会では1982年(昭和57)に、環境に関心のある人たちの提案で(水車のある集落づくり)構想が始まりました。代表になった

るのは、畠山さんたち海の民が抱く環境への危機感に、山の手側からも応える人たちが生まれてきたからだ。参加者も徐々に増え、第13回には1000人に達する。今では6月の第1日曜日が恒例となった植樹祭に、全国から人が訪れ、繰り返し参加する人もいるという。

〈牡蠣の森〉から
〈ひこばえの森〉へ

小野寺さんの案内で(ひこばえの森)を見学した。初期に植えられた落葉広葉樹が育ってきており、暗い針葉樹林を見慣れた目には、明るい緑が新鮮に映る。

50年後にここで育った木材で家具がつくられたら素晴らしいですね、と言ったところ

「森は海の恋人」運動は、いわば海から森へのラブレター。それに応えて森林組合のバスに乗って小学生たちが舞根湾を訪れたのは、第1回植林の翌年、1990年(平成2)のことだった、と畠山さんは振り返る。

森から海へ

「森は海の恋人」運動は、いわば海から森へのラブレター。それに応えて森林組合のバスに乗って小学生たちが舞根湾を訪れたのは、第1回植林の翌年、1990年(平成2)のことだった、と畠山さんは振り返る。

のは小岩邦彦さんという役場のOBで、長らく自治会長を務めています。小岩さんは農村景観を取り戻そうと水車小屋の復元、環境保全型農業の実践などに取り組んできた。こうした活動の一環として、地産農産物を販売する「こつとんこ」市の開催やアイガモ農法の実践、絶滅寸前だった矢越カブ生産の復活も行なっており、1994年(平成6)の「岩手県活力ある我がむらづくりコンクール優秀賞」などを受賞している。

また、他の団体でも活動が呼応し、水質検査やカツナなどの水生生物の保護、蛙の放流、木炭を使った水質改善作業などを行なうようになった。「当時は減農薬で、と思っても、収益の落ちることがわかっている中でなかなか実現できない実状があった。今、減農薬が実現できているのは、農家に先がけて消費者の意識が変わったためです。ところが第12区自治体は、そうした消費者から要望が挙がってくる以前から環境保全型農業に取り組んできたのです」

と小野寺さん。「牡蠣の森を募う会」からの働きかけに室根村が呼応したのは、こうした土壌があったからこそだ。



上：蠣殻は砕かれ畑に撒かれる。山から戴いた恵みの一部が肥料となって、また、山に還されるのだ。
左： ひこばえの森 に植樹された苗木の1本1本が、ウナギに変身していくに違いない。
下： 畠山さんのもとを訪れる子供たちは、二丁櫓の大型和舟「あずさ丸」と「あずさ丸Ⅱ」で養殖筏まで出かける。舟体はもちろんだが、特に舟の櫓は、しなりがよく水に強いミズナラ、古語でいう柞(ははそ)の木でつくられる。「あずさ丸」は、切り離せない海と山の象徴でもある。



「このとき、すごく印象に残っていることがある。牡蠣にやる餌は何かと聞かれ、豊富なプランクトンがあれば餌はいらないんだと答えたら、『漁師さんはドロボーみたいですね』と小学生に言われたんだよ」

海の生物のことを何も知らない山の子供たちに、畠山さんはプランクトンネットで採取したプランクトンを飲ませたり、顕微鏡で覗かせたりする。顕微鏡の中でうごめくプランクトンから食物連鎖の話が始まり、やがて水俣病の原因にまで話は及んでいく。こうした活動の中から、環境への意識が芽生え、将来の進路に影響を受けた子供も多いという。

「見学に来たあとに感想文が送られてきたんだけど、『朝シャンのシャンプーを半分に使いました』とか『お父さんに農薬を減らすように頼みました』と書いてあるのを見て、本当にうれしかった。相手の顔を知ること、迷惑をかけてはいけない、役に立とうというモチベーションが上がる。だから、私たちは〇〇しないでくださいと言うのではなく、海での暮らしを山の子供たちに知ってほしい

「このとき、すごく印象に残っていることがある。牡蠣にやる餌は何かと聞かれ、豊富なプランクトンがあれば餌はいらないんだと答えたら、『漁師さんはドロボーみたいですね』と小学生に言われたんだよ」

「森は海の恋人」運動は畠山さんたちからの片思いではなく、きちんと相互に意志疎通ができる運動に育っていった。畠山さんはその秘訣を「生活者の運動だったから」と位置づける。運動家による運動だったらどこかで止まってしまったかもしれないけれど、生活すべてを見せることで運動の範囲がどんどん広がっていったからだ。

最近、畠山さんが運動の成果を実感するうれしい出来事が、また一つ増えた。ウナギが舞根湾に戻ってきたのだ。

「ウナギは自然環境を量るとき指標生物のトップ。良い河川環境の所にしかない。たくさんいたウナギが40年前にはたつといなくなったことを思い出すと、今年の植樹祭の前日に2匹わなにかかっていたのは、すごくうれしいことでした」

舞根湾に戻ってきたウナギは、畠山さんの期待を一身に背負う、期待の星なのだ。

「森は海の恋人」運動を 地域資源に

活動の地元に来て初めて気づいたことは、単に海のために森が大事では済まされないということ。都会にいくと、ついそうした図式でしか理解できないようで反省させられる。島山さんも小野寺さんも言っていたが、「木を何本植えれば水がどれぐらいきれいになるか」ということではないのだ。海の生き物がどう育つか、森の木がどう育つか。そして何より、私たちの暮らしが、それらにどうか関わっているかが問題である。

環境体験学習で舞根湾を訪れる人が増えるにつれて、他の地域でも地元オリジナルのスタイルをつくり始める動きが起こってきた。気仙沼・本吉地域体験学習推進協議会も発足、気仙沼市、志津川町、津山町、本吉町、唐桑町、歌津町、宮城県が参画している。(牡蠣の森を慕う会)から始まった体験学習は、減少傾向にある各地域の観光事業と地域産業の活性化にも一役買っているようだ。

唐桑町観光協会事務局の白井亮さんの話では
「町の活性化が目的なので民間が、というところで、行政から外郭団体である観光協会に事務局が変りました」とのこと。島山重篤さんも20名ほどの推進委員会の一人として協力している。



白井 亮さん

唐桑町は、気仙沼湾の東に突出する唐桑半島の東海岸に位置する大石海岸や巨釜半造(石灰岩が浸食されてきた独特の奇観)など美しい自然景観の宝庫。しかし観光客のニーズが多様化する状況下で、見るだけの観光では人が呼べず、観光客離れが深刻化していた。

唐桑町の観光客の年間入り込み数は1979年(昭和54)の65万人を境に年々減少。2006年(平成18)には最盛期の半分近くの37万人まで落ち込んでいた。これは唐桑町だけではなく、どこも似たような状況。そのような中で、漁業や林業にまつわる体験メニューは観光客減少に歯止めをかけるだけでなく、基幹産業の活性化をも示唆している。

「体験メニューでは、実際に漁船に乗って養殖筏の見学、ホタテの養殖作業に欠かせない『耳吊り』体験、ワカメなどの加工作業などがありまいる地域もあり、海だけではなく里山や牧場、田畑にもフィールドが広がっています」と白井さん。

悩みは、まだ日帰り客が多いこと。唐桑地区だけでも11軒の民宿があり、是非泊まりがけで訪れてほしいとい

うことだ。

「牡蠣の森を慕う会」同様、地元の人々の生活を知ってもらうことに意味があります。また核家族が増えている現在、大人の人の話を聞く経験がよかった、と評価する声もよく聞きます」

島山さんは、舞根湾を「天井のない教室」と呼んでいる。環境が良くなれば、人はもつとやって来る。海を知り、生き物を知ること子供が感化され、それが親から行政に伝わっていくれば、漁業だけでなく農業も林業も変わるはず。地元にも活気が戻ってくるはずだ、と考えているからだ。地域全体が潤うためには、環境も良くなるしかない。

海と森を守るといことは、単に植樹と環境学習を進めればよいというものではない。流域に連なるそれぞれの地域の活動が、水を意識することに結びついた結果、自分たちの生活にもプラスになるという気づきを促したのだ。

海と山、そして都会も

海と山のつながりだけではなく、もう一つの意外なひろがり証言してくれる人がいる。水産新聞の記者、大村隆男さんだ。

「私が手伝っているのは雑用全般」と言う大村さんは、得意の筆力を生かして「森は海の恋人」運動の広報分野を担っているようだ。第1回目の植樹祭から参加していると聞いて、そのきっかけをうかがってみた。

「島山さんがつくる牡蠣は、実に良

い牡蠣なんだ。それでずっと注目していたんだけど、その牡蠣を養殖する環境づくりのために植樹を始めると聞いて共感を覚えたんです」

東京・築地の事情にもくわしい大村さんは、島山さんの唐桑牡蠣ファームが多いこと、全国のレストランのシェフからも支持されていることを教えてくれた。

「だから地元の唐桑、山手の室根だけではなく、東京をはじめ全国から共鳴した支援者が駆けつけたんです」

大村さんは島山さんを、バイタリティにあふれ、思いついたらすぐい人を引つ張っていく魅力を持った人物、と評する。活動が長く続いた秘訣を、

「商業的なこと、政治的なこと一切無関係。来る者は拒まず、去る者は追わずで、オープンな姿勢がよかつたんじゃないかなあ」と言う。

「森は海の恋人」運動が全国区となった一因には、こうした背景があったのだ。消費するだけで実質的な生産活動がないといわれる都会でも、こういう形で生産地とつながり、支援している人がいるということは、とても意義深いことだ。

海は第二の森

島山さんの著作には、思わず舌舐めずりしたくなるような魚貝類を食するシーンが多く登場する。しかし、いつからか魚貝類はそれほど探れなくなり、魚食文化も少しずつ廃れつつある。

「コンビニでおむすびが幾つ売られているか、知っていますか? 年間60億個だそうです。日本で生産される海苔は100億枚でその3分の1がコンビニおむすびで消費されている。それほどに、お米を食べるには海産物が必要なんです」

おいしい魚貝や海苔が採れなくなれば、お米の消費も減っていくのは必然だ、と島山さんは言うのだ。生態系の豊かな汽水域を守ることが、魚・米食文化を守ることにつながる。そして汽水域を守れば、海藻プランクトンによる光合成が期待できる

も。
「そういう意味で海は第二の森。沿岸の海の森がどれぐらい二酸化炭素を固定しているか科学的に証明できれば、守ろうというモチベーションがもつと上がるはずなんです」

日本は山の森と海の森に、二重に囲まれている。両方の森を守るためには、単に植樹すれば終わりではない。海の民も山の民も、その本質に気づき始めている。

「森は海の恋人」運動が来々20周年を迎えるまでになった今、起爆剤としての効果が、海、川、山といった「地域」、漁業、林業、農業、観光立場の「人たち」という思わぬところまで波及している。この運動は、今後も形を変えながら発展していくだろう。そしてその担い手である第2世代は、確実に育っているようである。





水への畏れや礼節を超える遊びの文化

愛でる楽しむ華やぐ

普段、何気なく接している水。
豊かなで安全な水に恵まれている今の日本では、
水に込められた深い意味を忘れがちだ。
「水にかかわる生活意識調査」で浮き彫りになった
水への思いを、
鳥越皓之さんに民俗学の視点から読み解いていただいた。
水とのかかわりが、
私たちの精神の礎となっていると気づくことで、
新たな価値観の創造につながるかもしれない。

鳥越 皓之

とりごえ ひろゆき

文学博士

早稲田大学人間科学学術院教授

1969年東京教育大学文学部史学科（民俗学）卒業、1975年東京教育大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程単位取得満期退学。関西学院大学社会学部教授、筑波大学大学院人文社会科学研究所教授を経て、2005年4月から現職。

専門は社会学、民俗学、環境問題、地域計画。主な著書に『水と人の環境史—増補版』（編著 御茶の水書房 1991）『柳田民俗学のフィロソフィー』（東京大学出版会 2002）『花をたずねて吉野山』（集英社新書 2003）『環境社会学』（東大出版会 2004）ほか



甘い水

日本には「甘い水」、中国でいうところの「甜水」という発想があります。これは、考えてみると大変贅沢な話ですね。私たちは、水が豊かなだけではなく、甘い水が飲める民族だということです。

水の利用の第一は、なんといつても「飲む」ことです。

「仏様（神様）の水はどの井戸から汲みますか？」と聞くと、村で一番古い井戸がどこかがわかります。一番神聖な水は神様や仏様に捧げる水で、村の本来の泉、つまり村の発祥のところに中心となった泉から汲むことが多い。それでわかるんです。

日本語で水の出る所を指す言葉には二つあって、どちらも由来は不明ですが、一つは「井」、音で言うところ「ウイ」です。字井さんという名字があります。これなんかは本来、井戸さんという意味なんでしょう。井ケという溜まっている水を表し、井ケルという動詞にも変化します。古いワ、井、エ、ヲで、W音が入っているのは今は「ワ」しか残っていません。

もう一つは「カー」です。これは勝手な解釈なんです。湧き出て留まっているのが井で、カーといったら、湧き出てからこちよこちよ流れている水を指すようなイメージがありますね。

大きな井戸を掘ったり水汲みをしたりしたのは、戸数が大きくなって湧き水だけでは足りなくなってきたから

その井戸も明治に入る以前は浅井戸です。

江戸時代の大阪では、間違いなく川の水を飲んでいました。大阪では井戸を掘っても良い水が出ず、かえって川の水のほうがおいしかったようです。

中国の北京も同様で、北京の井戸の水は「辛い水」だったといえます。辛い水というのは、どういふのでしょうか。想像ですが、硬度が高い水をそう呼んだのかもしれない。軟水のほうが柔らかく感じられますから。「うたた水」という言い方で、柔らかくなった水と呼ぶ地方もあります。

しかし旨いのは圧倒的に湧き水。これは、はつきり言って旨い。筑波山の辺りにも、琵琶湖周辺も、全国に湧き水が多い。イギリスにも、中国にもたくさんあります。

昨年、中国の太湖のほとりの無錫（江蘇省）に行ったんですが、やはり市民は湧き水を飲んでいました。市は水道を使えと言っていますが、太湖のこの湧き水もやがて埋められてしまいます。政府は、住民たちの生活は見た目に汚いので高層住宅をつくって移住させ、村をなくしてしまうという計画を立てています。

100も200もある家屋を全部壊して平らにして、西洋近代的な芝生にするというんです。うまいお茶が淹れられる湧き水を埋めてしまうというんです。残念ですね。

そこでは夕方になると、みんな集まってお喋りしているんですよ。高層住宅に移されたら、このような習

慣もなくなりやすよね。これは、かつての日本でも行なわれてきた「近代化」ですが、住民は政府には反対もできないといっていました。

洗濯の水

飲む水の次に「洗う」水がありません。面白いのは洗濯なんですね。日本の洗濯の仕方は、何度か変遷を経ています。基本的には女性が行なうものとされてきました。

川で踏み洗っているのが、記録に残っているのも古いスタイルです。なぜ足で踏んだかというところの衣服は、芋などの固い繊維でできていたからです。

これは有名な話ですが、久米仙人の伝承に洗濯の仕方が垣間見られる話が出てきます。この伝承も江戸期になると川柳に詠われるようになって、

毛が少し見えたで 雲を踏み外し
未摘花

久米仙人
葛城山の麓で生まれ、吉野の竜門ヶ岳（へりゅうもんがたけ）で修行していたが、ある日空を飛んでいると、吉野川で洗濯をする若い女性の白い脛が見えた、それに目がくらんで神通力をなくして墜落し、俗人に戻り檀願寺の久米寺を建てた、という伝説が、『今昔物語集』巻十二 本朝仏法部に残っている。

着物の裾をはしより上げて、脛を剥き出しにして踏みながら洗う、というスタイルは、男性にとつて大変刺激的だったという話です。

韓国は今でも碇で打って洗いますね。日本では、碇が洗濯のときに本

当に使われていたかどうか、はつきりしないんですよ。

芭蕉は『野ざらし紀行七』の中で、碇打て 我に聞かせよや 坊が妻

松尾芭蕉

と詠っていますが、碇は繊維を光らせる効果も持っているんで、洗濯だったかどうかは明確にはわかっていません。しかし、少なくとも木綿が普及して踏み洗いが手洗いに移行し、もっと最近になればたいはい、洗濯板を使うようになり、私たちが経験した風景の記憶にもつながっていく。その後、洗濯機へと変わっていくのが、洗濯の流れです。

用水をすぐに排水にさせないシステム

ものを洗うにもルールがあつて、汚いもの、たとえば赤ん坊のおしめなんかを洗うときには、下流の人に迷惑がかからないような場所で洗いました。そして、洗った後の最後の排水は田んぼに流していました。

これは、用水をすぐに排水にさせないシステムなんです。無駄に捨てずに、繰り返し使おうのです。

私たちは、水を用う→用水→用水→用水としてこく使つていって、最後の最後に排水にしてみました。水に対して、そういう伝統を築いてきたんです。

住むのに適さず、畑もつくれない土地、悪水が滞る土地というのは、利用価値のない「ダメな空間」ということです。伝統的な用水のシステムは、逆に考えてみれば「ダメな空間

覆水 盆に返らず

水も滴るいい男(女)

水に流す

古池や蛙飛び込む水の音

山紫水明

水辺

我田引水

水流

水車

魚心あれば水心

水源

清水

水を含む好きな言葉

95年単年データ

「覆水盆に返らず」をすぐに思い出すというのは興味深い。「水を得た魚」とか良い意味が来ると思ったが、実際には、「水に流す」「我田引水」「魚心あれば水心」といった、どちらかというとネガティブに使われる言葉が登場している。

「我田引水」現在の生活ではほとんど使われないが、言葉として刻み込まれている。
http://www.mizu.gr.jp/kekka/1995/kekka95_17.html

1.7% 1.7% 1.7% 2.1% 2.1% 2.1% 2.4% 2.8% 3.0% 4.3% 4.9% 11.1%

間」をつくらない知恵でもあつた。用水化することで、うまく下流まで持つていって排水にするというのは、用水システムであると同時に排水システムでもあつたのです。

水道ができて、手を洗っただけで排水になつてしまふ今の「用水→排水」システムには、用水→用水→用水→用水としてこく使つてから排水にしていた緊張感失われてい

溜める水の文化から流す水の文化へ

実は溜める水は大変大切で、流す水よりずっと重要ですよ。いかに流さないで溜めるか、ということがずつと課題だつたからですよ。水は大切であると同時に半分魔物ですから、洪水の恐れのある水辺近くではなく、ちよつと離れた高い所に住み家をつくつていきました。その結果、水辺から住む所まで水を汲んできて溜めておく必要が生じたのです。

水汲みも、なぜかはわからないのですが女性の仕事です。場合によっては、子供も水汲みをしていました。沖繩の玉造村のフィールドワークで、水辺と村をつなぐ石の階段が、角が丸くなつていて、その労働の過酷さに驚いたことを覚えています。

こうして汲んでこられた水は大変貴重なものだから、必ず溜めて使いました。もちろん地域によつては例外もあつたでしょうが、顔を洗うにも野菜を洗うにも、溜め水で洗うというのが基本。ですから、流しな

がら、ということでは考えられないことだつたんです。開発途上国では、今でも溜める水を使っています。

溜める水を使っている分には、排水システムはさほど必要ではありません。使用する水量が少ないからです。使った後に植木にやるとか庭に撒くとかすれば、地下浸透も可能です。

また小さな川を村の中まで引いてきて、せき止めて溜め、火災に備えました。防火用水とはいえ、水が溜まっていれば子供たちの遊び場になるし、野菜や果物を浮かべて冷やしたり、小魚が泳げばおかず捕りもしました。水が生活に近くあつたということですよ。

例外的に水が豊富な地域では、トイレは川の上に板を渡して用を足していた。つまり川屋ですね。トイレのことをカワヤと呼ぶようになったことは、不思議なことですね。カワヤは普及していかない、珍しい事例だつたわけですから。

私は農村でカワヤを見たことがありません。自分より下流の人たちの生活を考えたなら、上流で尿を流すなんて考えられませんよ。でも、庶民を人間だとは思っていないかつた京の貴族階級が、もしかするとやつていたのかもしれない。

日本が近代化の過程で水道を導入したときに、緊急に排水システムが必要になりました。その結果、使った水がすぐに排水になつてしまふという、とても不器用な排水システムにしてしまいました。そして、その排水システムは改善されないまま、

今に続いています。

しかし、排水というのは住んでい
る場所への影響が高い事柄ですから
本来は軽々にシステムを変えてはな
らなかつたと思います。排水とい
うのは使われなくなった水というこ
とで、いわばゴミに変えていること
なんです。

昔、嘉田由紀子さん（現・滋賀県
知事）と琵琶湖周辺を調査したとき
に、溜める水の文化から流す水の文
化に、すごい勢いで変わっていくの
を目のあたりにしました。溜める水
の文化があったから、水を溜める器
や工夫があったわけで、そういうも
のもどんどん失われていっています。

おいしい水を飲むことで、 淡水を守る

水の生活意識調査でも、「おいしい
水は？」という問いに対して40%の
人が湧き水を選んでいきます。私も旨
い水を飲むためのNPOを立ち上げ
て、できる限りのことをやってい
こうと思います。それは自然を守るこ
と、淡水が守られることにつながる
ような気がします。アンチ水道化
です。

真面目に取り組もうとしたら、産
廃と農業とゴルフ場と闘わなくては
なりません。これらをストップさせ
るのは容易なことではないけれど、
単なるストップだけじゃなく「おい
しい水を飲む」という積極的な目的
が大切なんです。結果的に反政府
運動なんだけど、かわいいですよ、
「旨い水を飲む会」だったから。

水の三大要素 「姿が見える」「景色」「旨さ」

生活の中の水と関わらないうと思
いますが、「水は姿が見えるもの」で
した。生活の中の水、身近な水だっ
たからこそ「覆水盆に返らず」とか
「水も滴るいい男」だとかいった言い
回しもアンケート結果に出てきたの
だと思っています。

もう一つの側面は、身近な水だっ
たから、「景色」としても重要だった
見るという行為を通して、水はきれ
いなもの、価値のあるものというプ
ラスのニュアンスを育んできました。
「好きな水辺」のアンケート結果でも
景色としての水がずいぶん意識され
ているようです。そういうことから
も、景色としての水が私たちの生活
の中で大切なものとして存在してい
たことがわかります。

三つ目には、飲料水としての重要
性です。飲む水は「甘い水」として
意識されてきました。

水道が日本に敷設された一番の理
由は、「衛生」だったと聞いています。
しかし水道は、今までの水の使い方
を大きく変えてしまいました。水の
三大要素を改めて意識してとらえ直
してみたときに、水道水というのは
この3つを明確に裏切っています。

そして、この3つを裏切っている
だけでなく、セットになって存在し
ていたこの3つを分断してしまっ
つまり水の機能の分断です。
もう少し我慢して工夫していけば
よかつたのに、一気に水道水に切り



好きな
さんずいの
つく漢字

好きかどうかは別として、海、清、涼、流、湖あたりは、誰もがすぐに思い出す
ということだろうか。1999年に河が登場
するのは、97年の河川法改正等に伴うマ
スコミ露出に起因するのかもしれない。

http://www.mizu.gr.jp/kekka/1995/kekka95_17.html

1995

涼 7.3

波 2.6

湖 7.1

泳 3.2

沙 2.4

海 20.8%

滝 2.4

清 13.3

溪 2.1

流 6.6

1999

涼 8.2

波 2.0

湖 6.3

泳 2.9

河 4.3

海 24.3%

滝 3.1

清 13.5

溪 2.0

流 6.5

渚 2.0

替えてしまったために、私たちは工
夫と文化がない水システムに甘んじ
ているわけです。

しかし、これには絶対に揺り戻し
があると思っています。世界中を水
道水にしたら、統計的には淡水がな
くなってしまふことはわかつてい
るんです。それなのに、安易に水道化
を進めようとしているのは、どうし
てなのか。それは、水道水が常に肯
定されたイメージを持ち、プラスの
価値を持つているからです。

グアテマラにも日本のODAが水
道を引きました。水道を引くという
ことは、排水のシステムとセットで
考えなければ衛生的に問題が出るか
もしれないし、溜める水の伝統も失
われてしまう恐れがあります。

そこでは、それまで湖に行つて自
由に水を汲んでいたのに、水道水し
か使えなくなつた。でも水道水は、
ポンプを使って汲み上げるから料金
が高くてお金持ちしか使えません。
しかも排水は村に垂れ流されていま
す。だから、反対運動が起こつてい
ます。

もちろん水汲みは過酷な労働です
から、女性や子供をそこから解放す
るという意義は大きい。でも、今の
ままのやり方は、正しいとは言えま
せん。

民俗学の見地

日本人の自然観には、礼節を重ん
じるという発想がある。自然保護と
いつても、単に自然を守ろうという
考え方ではないんです。それが西洋

のエコロジーとはちよつと違う。だ
から「山に紅葉や桜を植えるとい
うのは良いこと」であつて、自然に
対してローインパクトであろう、とい
う発想ではないんですね。「自然保護
か自然破壊か」という考えと、別の
軸を持つているのです。

こうした感覚が、私たち日本人に
独特の水文化を育みました。

民俗学は単に「古い」ものを扱つ
ているわけではなく、普通に思つて
いる世界、ありふれた世界、「日本人
は流れている水を見るとなぜ手を洗
いたくなるのか」といったようなこ
とを対象にしています。

例えば水に関して考えた場合、農
山漁村の「水」が近代化の中で変貌
してきたことをどうとらえるか、と
いうことです。

近代化するにつれ、生活がものす
ごく変貌を遂げてきている。洗濯な
どは典型的です。これは一体なんな
んだろうか、どういう方向にいこう
としているのか、と問うていくのが
民俗学なんです。

ですから、ともすると都市対農山
漁村という対比になり、民俗イコー
ル農山漁村となつてしまいがちです
が、そうではなく変貌の前と後でど
う変つたのか、ということの問題と
したい。先ほど言った「日本人は水
を見ると何となく手を洗いたくなる」
という感覚は、都市的とか農山漁村
的とかでは分けにくいでしょう。

水神さまへの信仰もそう。確かに
農村に行つたらたくさん見られるん
だけれど、都市、農村という分け方
では存在しない。

言葉を使い換えると、そのときは「日本民俗学は人間の存在のあり方を問う学問である」と言えるかもしれない。

民俗学の視点から水辺や水の本質について考えるとき、私は折口信夫が「春の大潮」と「雛祭り」のことを結びつけているのが、大変象徴的な事柄だと思います。

折口信夫(1887~1953)
日本の民俗学、国文学の研究者。国文学の起源をマレイト信仰に基づく祝詞や呪言に求め、ヨリシロに聖なる靈魂が呼び寄せられるという学説を基にした独特の「折口学」の世界を展開した。詩歌もよくし、一時期「アララギ」にも参加している。

大潮は、春と秋の2回。このことは日本の国土に住む人にとつては、大変大きな意味を持っていました。つまり、「春になって暖かくなって木の芽が芽吹く時期に大潮がくるのはなぜか」と当時の人は考えたのです。折口信夫は著書の中で、春の大潮のことを「常世波」と呼ぶ地域があると紹介していますが、この呼び方は「なぜ大潮が木の芽が芽吹く時期にくるのか」という一つの答えになっています。

常世というのはあの世のこと。しかし、悪いあの世ではなくて、難しい表現になるのだけれど妣(はは)という字を書いて、本源という意味のあの世。まあ、天国と訳してもいいのだけれど、その常世から押し寄せてくる波という意味です。

海から押し寄せる大潮は、湧水である泉にも川にも井戸にもやってくる。つまり、すべての水は底のほう

でつながっていて、自分の村の共同井戸にも大潮の力がやってくる、という考えです。

だからその時期には、海べりや川べりでのお祭りというものがあつた。そのお祭りはなぜか女性が行なうんですよ。小理屈をつければ「女性が神の化身だから」ということでもできるのですが、その理由は本質的にはわからないんです。

ただ春の花、それは将来的に「サクラ」に集約されていくんですが、花を愛でる春の遊びというのは、なぜか女性を中心なんです。

そのうち、日が重なるのが吉ということで、3月3日に固定していきます。ただそれは暦ができてからのことであつて、本来は大潮のときに女性が水辺に出て行って祭りをするのが、春の行事だったのです。

これがいわゆる雛祭りになつていきます。「ヒナ」という言葉の語源は、小さな、という意味。最初はヒトガタを川に浮かべる祭りでした。

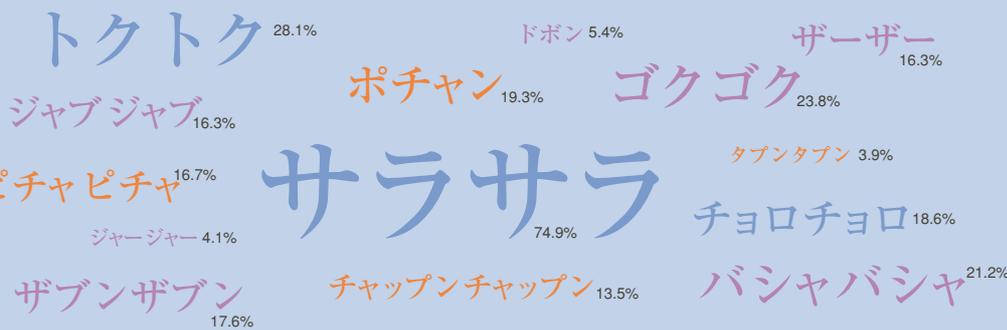
ミソギとハライ

ここからが民俗学の解釈になるのですが、これはミソギであろうと考えられています。

ミソギというのは難しい概念ですが、春の復活の力を得ることです。ところが、この雛祭りという行事は大変な勢いで変形していつて、気楽に外に行かなくなつた高貴な女性たちは水辺ではなく自分たちの家でするようになつていきます。しかも、ミソギが終わつたら水に流さなくて

好きな擬態語 擬音語

圧倒的にサラサラが多いのは、歌詞に使われているからか。しかし、ピッチピッチ、チャップチャップは登場しない。
http://www.mizu.gr.jp/kekka/1995/kekka95_15.html



はいけないヒトガタを永久の人形にしてしまつて、家の中に閉じこもつて行なうようになりました。

今ではこつちのほうが、ふつうになつてしまいましたよね。雛祭りは家の中に閉じ込められた女性たちが執り行なうなんていう解釈も出るほどになつていますが、もともとは女性には閉じ込められる存在ではなかったのです。

では女性たちは、本来どんなことをしていたか。山に行つて花を採り遊びました。この「アソブ」というのも説明が難しいんですが、おもちゃで遊ぶというようなことではない。花を愛でて楽しむことで、本人たちが華やくというようなニュアンスがありますね。

コミュニケーションにおいて、その空間において、「力を得る」ための行為が「アソブ」なんです。

ミソギという概念は、神様に対峙して見るように変わっていきます。神様の前に行くときにミソグという発想が出てくるんですが、本来は自分自身が力を得るために行なうことです。

もう一つ、非常によく似た概念がハライです。ミソギをして力を得るときに、自分の悪いところが除かれるんですね。それがハライ。

人間誰しも、よこしまな心を持っていて、年に一度ぐらいはそれをハラわなくてはならない。そのために庚申講というのができるぐらい、よこしまな心は問題視されてきました。

庚申講(こうしんこう)
庚申の日に営まれる信仰行事。道教では人の

体内に三戸(さんし)という虫があり、庚申の夜に人が眠ると天に昇つて天帝にその人の罪を告げるので、長生きするためにはその夜は眠らないで身を慎むという信仰。次第に仏教的な色彩を帯び、民間に広まつて村落社会の講組織と結びついていった。

だから可哀想な人形が人間のよこしまな心を肩代わりして、水に流されることで、人間は清められる。人形には、そのような役割があります。

水の生活意識調査のアンケート結果でさんずいがつく漢字の上位に「清」という字が登場するというのは、民俗学的な「水の解釈」を反映しているものなのかもしれませんね。

若さが力であるという発想

日本における水とは、このように「力を得るもの」なんです。「水に触れることで、力を得るんだ」という信仰です。

若水の信仰も、同じ。ワカは力。「若返る」というのは力を得ることを意味します。「若水汲み」という行事は全国に広く分布し、暦にもなつていて、地域によって青年や女性の場合もあるんですが、多くは戸主が正月の明け方に水を汲みに行く行事です。

元旦だから家の長である戸主が行なうとされ、地域によっては、この日だけは料理も男性がすることになつていきます。

『水の文化』の26号に変若水の話が出てきますよね(26号10ページ藤田敏一郎さんのお話)。若く変わる水というのは万葉集の当て字であつて、

理屈の通り書いたわけですが。おそらく「若さが力である」という発想からきている。

変若水というのは湧水とほぼ同じ概念で、山が終わった辺りから、しやらしやら染み出してくる自噴水。昔、日本人が一番水を得ていたのは、そういう場所からだったことがわかります。

逆に言えば、変若水のある場所に村が形成されていったというほうが正確でしょう。村そのものが水に依存していたことが、伝統的な日本の村を歩いていくと実感できます。例えばイギリスでは、シテイと呼ばれるところにはファウンテンが、農村にはやや規模が小さい湧水、スプリングが必ずあるところを見ると、これは世界共通ですね。

水に力があるということは、末期の水のときにも表れます。死ぬというのは、身体から魂が出ていくことです。魂が出ていかないうちに水を与えるんです。それにもかかわらず出ていった魂は、第一段階として少し高い所から自分の身体を見下ろしている。このとき間髪を容れずに屋根に上り、「○○ちゃん、帰ってきて——」と叫ぶと呼び戻すことができる、という信仰もあります。霊呼ばいといって、関東に多い。

しかし、これもどんだん形骸化していった、演劇のようになっていく。本来は切実な気持ちから発せられて行なわれたものが、形骸化して「虫送り」のように行事化していくというところは、自然な成り行きかもしれません。



出典：菅江眞澄『民俗図会』中巻（岩崎美術社 1989）

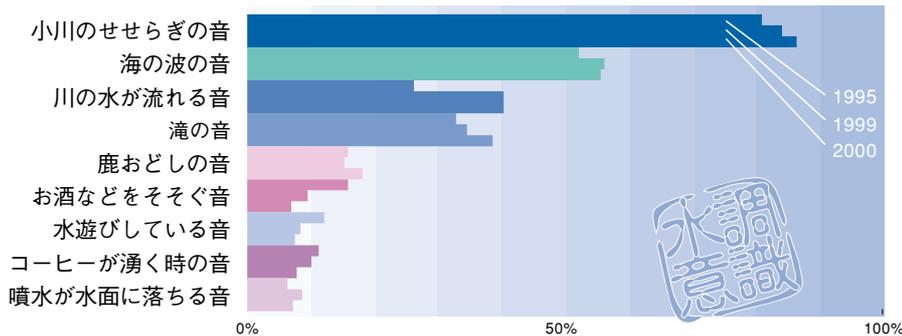
虫送り
平安末期の武将 斎藤実盛が稲の株につまみ倒れたところを討たれたため、その恨みから害虫になつて稲を食い荒らすという伝承が各地に広まった。農作物の害虫は悪霊に寄つてもたらされるとし、悪霊を薬（わら）の人形に移し、鉦（かね）や太鼓で騒しなげら、村の田を一巡して村境に送り出す行事。江戸時代に始まった。

末期の水も若水も、ともに力を得るためのもので、水はそのように位置づけられてきました。日本の歴史の中でいろいろな変移があるとしても、原則的に水は力を得るためのものであったのです。

水旱を自由に操る水の神様との結婚

昔話の中には水の神様との結婚という話がよく出てきます。水の神様と結婚できたら、水旱を自由に操れる。つまり、水のコントロールが可能になるのです。

みなさんがよく知っている例に、蛇女房の話があります。村の子供たちが蛇をいじめているところに若者が通りかかると、蛇を助けてやり、蛇は無事に逃げて湖に帰る。夜にな



好きな水の音

http://www.mizu.gr.jp/kekka/1995/kekka95_14.html
http://www.mizu.gr.jp/kekka/1999/kekka99_21.html
http://www.mizu.gr.jp/kekka/2000/kekka00_25.html

るとその若者の家の戸をトントンと叩く者がいる。娘に泊めてほしいと言われるまま泊めてやり、やがて二人は結ばれて子供ができる。女房は「子を産むところを見ないでほしい」というのですが、若者は思わず見てしまう。すると、女房は蛇の姿に変わっていた。以前助けた蛇であることがわかってしまうのです。

蛇は「姿を見られたからには、ここにはいられない」と湖に帰っていきます。この場合、子供は後に歴史上大きなことをした人物と結びついていきます。また、蛇は水の神を意味します。

吉野山にも水分神社があり、奈良盆地の水を差配しています。水がないときには、水源まで行って拝んだり、水の神を怒らせるようなことをしたりします。

いずれにしても神様は水源に住んでいると思われていました。しかし、亀とか河童は神様にはなりませんねえ。私が民俗学の聞き取りを始めたころには、まだ河童と相撲を取ったというおじいさんがいました。「おじいさん、本当なの？」と聞くと「本当」と答えたことを思い出します。

さすがに最近はこのいう人とは出会わなくなりましたが、河童というのは水の神が零落した姿なんですね。神が信仰を失うと化け物になるんです。雷もそうです。ちというのは神様を意味しているんですが、信仰を失った天の神の姿です。一つ目小僧もそうです。信仰がなくなると異形に姿を変えて、化け物に零落します。

それに比べて、蛇は水の神として日本だけでなく、東アジア全般で不動の地位を持っています。

魂の内の浄化されたものが神様になる

物事すべてに霊が宿る、という発想は、日本で強くみられます。アニミズムという西洋の解釈は好きではないので、あえて言い換えますが、「霊論」なんです。すごい強固な魂論が、日本にはずっと存在してきたんです。

シンボリックな事柄として、お精霊舟があります。お盆には先祖の霊が家に帰ってきて生き御霊と死霊が、まあ家族団欒をするわけですが、お盆が終わると、先祖の霊はふつう、山に帰っていきます。しかし、琵琶湖の辺りでは山ではなく琵琶湖に帰っていく。そのときに先祖の霊は、お精霊舟に乗っていくのです。これは、多くは薬でつくられます。

こうした根強い魂論が脈々としてあるからこそ、水のシンボルとしての水の神が存在し、人間も一人ひとりが魂を持っていて、亡くなった人の魂も拝めば浄化される、だから拝まなくてはいけない、と考えるわけなんです。

そして魂の浄化されたものが神様になる。氏神様などはそうした神様ですね。つまり、神様は自分たちにつながっており、しかも浄化された神様だから、悪いことはしない。もし災害が起こったとしたら、自分たちに対してサジェッションをしてく

れている、と解釈します。

水害で、東北のある村落が全滅したことがあるのですが、それに対して「日頃私たちはつい川に対しておろそかになっていた。安易にゴミを捨てるとか、手入れをしないと。山の神（『水の神』）はそれをお怒りになって、洪水を起こしてゴミを浄化してくださった」という解釈をするんです。これは典型的なことです。

ですからこの霊論が弱体化してくると、当然礼節というものが弱体化していく。対象に対する態度が変わってきますよね。

しかも、その霊論が変わる価値観がまだ生まれてこないのも問題です。ただ、心の底には、まだかすかに霊論が根差している。私たちは初詣のときに「もしや」という気持ちで願いをし、お賽銭を上げます。

お墓に行くのが怖い、というのも同じです。幽霊というのは拝まれなくなつて浄化されない霊ですから「魂なんてない」と思っていれば恐ろしくありません。

礼節はなくなったのに畏れだけがあるのかといえは、そんなこともないでしょう。

調査先のトカラ列島で丸木舟ができたときのことなのですが、初めて水に浮かべる際の儀式として、沖で左に3回、回るんですよ。それで、私はあれっと思いました。民俗学での事例で、同じことを経験していたからです。その内の一つは、牛を育てていた人が出荷する際に牛を連れて神社を左に3回、回ること。

もう一つは、人が亡くなったときに墓に入れる前に棺桶を左に3回、回すんですよ。この意味するところは「挨拶」なんです。丸木舟も、牛や死者も言葉を発せられないので、左に3回回ることによって挨拶をさせている。

これは生きている人たちが作法として、こうしたことをきちんと心得ている、ということでもあります。

この気持ちが、まだ私たちの中にあるような気がします。ただ、弱くなつてきていますよね。

礼節論が変わる 新しい価値観

この礼節論というのは、日本人を理解する上で大変魅力的な側面です。ただ、これをうまく説明できてこなかったことが、礼節論が変わる新しい価値観を生み出せない原因かもしれません。

南方熊楠が民俗学者になつた理由というのが明快で、最初は民俗学なんて馬鹿にしていたそうです。

ところが熊楠は、30歳でヒダル神が悪く縁談をするんです。

ヒダル神

人間に空腹感をもちたす憑きもので、主に西日本に伝わっている。北九州ではダラシと呼ばれる。人知れず死んだ者が祀られることなく周囲をさまよつて怨霊となり、人に取り憑く歩いている最中に突然、飢餓感や疲労を覚えそのまま死んでしまつてもある。山道、峠、四辻、行き倒れのあつた場所などで憑かれることが多い。ヒダル神を山の神や水神の仕業とする土地もある。

また私の恩師で、イタコ（巫女）



小川の底に石畳を敷いた沈下橋。大雨のときには渡ることができない。人との約束も「今日は大雨で川が渡れないから」という言い訳でキャンセルできた時代ははるか遠い。無理に水をコントロールしようとしなくてもいい生活に戻ることはできないのだろうか。

の研究者である故桜井徳太郎先生が言うには、恐山では、力のないイタコは屋根が半分ないようなあばら家に住んでいて、力のあるイタコはものすごい裕福だそうです。その一番力のあるイタコが1カ月間山にこもつて、小さなご飯茶碗1杯しか食べずにトレイニングをしても、なかなかハラエないのは水子の霊だそうです。産んですぐに殺された子供の霊は、母親にしがみついて離れないんだそうです。

本来、人間には守護霊が1個憑いているんだそうです。ところが転んだときとか、ひよんな拍子で憑いていたはずの霊がころんと落ちてしまふことがある。そうすると、心が空っぽになつて0になつてしまふんです。

問題なのは、自分たちの身体に本来は1個ずつ入っている魂が生きている間にどれだけ健全で、亡くなつてからは浄化されて神様になつていくか、ということなんです。

このように、日本人は自然や祖先に対して礼節を重んじる伝統を培ってきました。逆に言えば、自分の意思や努力ではどうにもならないものに対する、賢い知恵だったということかもしれません。

「水をコントロールできる」というのは、長い人間の歴史から見たら大変なことですよ。ですから水に対する恐れや礼節が失われつつあるのは、コントロールすることが可能になつたからとも言え換えられます。

しかし、水を完璧なコントロールの支配下に置いたことは、本当に良

いことなのかどうか。コントロールのあり方を、考える必要があるんじゃないでしょうか。

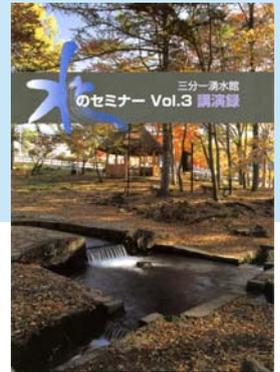
八丈島で調査したときのことですが、その人のお父さんは貧しい小作で水番をしていたそうです。雨が降ると、真夜中でもお父さんは走り出て田んぼに行き、水がうまく行き渡っているか夜じゅう見回りをしたそうです。その人はそんなお父さんの姿を今でも思い出すと、「親父が跳ね起きて水を配分しに行った、そんなことを我々はもう経験することができないじゃないか」と言つたのがとても印象に残っています。

どんどんコントロールできてしまふことは便利なことです。でも、便利というのがハッピーになるための道筋なのかどうかということについて、私たちは哲学を持っていません。

今まで便利を追求してきたけれど、コントロールを強化することが、本当にハッピーなことなのか。それは、明らかに違う。そうであれば、どうコントロールすることが私たちにとつてハッピーなのか。それを探つていく必要があります。

そこで求められるのは「遊び」の精神かもしれません。プレイとは違う、昔女性たちが山で花を愛でたような遊び。そのことが、コントロールの現状を変えてハッピーに近づくためのヒントのような気がします。水は力を得るために、今も昔も必要不可欠な存在なのです。





水の文化書誌 18 《水と暮らしの変遷》

古賀 邦雄

こがくにお
水・河川・湖沼関係文献研究会
1967年（昭和42）西南学院大学卒業
水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に入社
30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集
2001年退職し現在、日本河川開発調査会筑後川水問題研究会に所属



2007年7月8日、日本名水百選の三分一湧水（山梨県北杜市長坂町）を訪れた。三分一湧水館編・発行「水のセミナー Vol.3 講演集」（2006）の表紙のように、八ヶ岳の懐からの湧水が均等に農業用水と生活用水に分流されている。そのために湧出口の小さな分水楯のなかに三角石（分水石）を築き、日量約8500.0m³の湧水を三方に分岐させている。このことは水争いの絶えなかった戦国時代から、集落の人達が幾度となく協議を重ね、合意形成がなされた結果であろう。

山口昌伴著「水の道具誌」（岩波書店2006）にこの三分一湧水も述べてある。均等に分ける三角石は武田信玄の発案だったという。ここから流出する水の道は一つは水の通る道であり、もう一つは水使用の作法として守るべき道であると指摘する。私どもが何気なく日常使っている水道を、水使用の作法のもとに感謝を持って活用することを説いている。さらに、この書は束子、雑巾、水瓶、金魚鉢、井戸などの水の道具を全国各地に訪ね歩き、水と暮らしの変遷から水使用の作法を論じる。例えばバケツは舶来品だという。従来、バケツは木製の手桶、水汲み桶であったが、銀メッキをかけたブリキ、亜鉛メッキのトタンが

輸入されると、明治20年代、バケツの国産化が進み、全国に普及し中国や朝鮮にも輸出された。今では手軽なポリバケツが全盛である。日本は木の文化を育んできた。発行の石村真一著「桶・樽」（全3巻）は、桶・樽の形態、構造、材料、加工技術、日常生活や産業での使用方法について歴史的に考察する。その用途はヨーロッパではワイン用、ビール用、ウイスキー用の大樽でナラ材が使用され、中国では水桶、酒桶でその材はマツ、スギである。

日本ではどうであろうか。明治期、清酒用桶、味噌用桶、かい馬用桶はスギ材であった。その後昭和40年代以降、桶の需要は激減していく。それはお櫃やお鉢が電化製品にとって替わるからだ。保水性は桶製が、保温性は金属製がそれぞれ優れており、保温性と便利さが優先した生活に変わってくる。また酒造用、醤油造用、牛乳製造用の樽は現在ではステンレス製タンクである。

なお、この書は全世界の国々のあらゆる種類の桶・樽を論じながら、現代人の生活を次のように批判し、指摘する。「現代人は都市生活を中心とする消費生活でモノを総体的に理解する力を見失って



おり、経済優位の工業文化が樹木と共生してきた文化を破壊した。桶・樽の使用によって樹木文化の復元を図りたい」と主張する。

その復元の例を2つ挙げてみたい。あるアメリカ人は13年間もたらい舟の調査研究を続け、そして実際にたらい舟2艘をつくった。その記録がダグラス・ブルックス著、ウエルズ智恵子訳「佐渡のたらい舟―職人の技術」（鼓童文化財団2003）である。日本人の手を借りながらも減じようとする「たらい舟」を異国の人がつくり上げたその強い信念と情熱には頭が下がる。

もう一つは水の道具を復元した岐阜市のNPOグループである。それは風をおこす団扇である。水とは一見関係はないようだが、この団扇を水につけて扇ぐとあたりに清涼さを醸し出すという。不思議な団扇だ。水野醫生里著「水うちわをめぐる旅―長良川でつながる地域デザイン」（新評論2007）には岐阜提灯、加納の和傘の伝統工芸品を述べながら、水うちわの復元の過程を詳述する。団扇は提灯や和傘と同様に和紙と竹を原料とした製品である。水うちわの和紙は楮や三桤より繊維の長いチンチヨゲ科の雁皮という植物を原料としている。この雁皮紙はガリ刷りの原紙に使われていた。紙

自体は非常に薄く、張りがあつて水につけても破れない。水うちわには最適である。

1967年〜1981年にかけて社会的、政治的、経済的な出来事を水で捉えた阿部文伍著「水の歳時記」（論創社1983）は、放水車、人参で行水、水煙管、清涼飲料水、水天宮、水上警察署、水耕栽培、力水、水素エネルギー、水仕事などを挙げて戦後の風俗世相を描き出す。1969年3月、放水車（警備兼放水車）の項では、機動隊が東大構内に立てこもった学生たちに放水車で放水し、ずぶ濡れになって寒さに震えながらぞろぞろ出てくる様子を描写する。この放水車、消防活動による水はその料金を徴収することはできないと水道法に規定されているという。

さて、水と暮らしの変遷は、主婦の働き場である台所に如実に現れてくる。古島敏雄著「台所用具の近代史―生産から消費生活を見る」（有斐閣1996）には明治・大正・昭和期における台所用具について、光源（灯油など）、水源（湧水など）、燃料源（薪など）の3つの生活環境の変化を追っている。

水源の変化をみると、明治期では湧水、流水を経て掘井戸に変わる。農村では湧水・流水が続

き、都市部では掘井戸が中心となり、釣瓶井戸が用いられるようになり近代化が始まった。そして手押しポンプが現れ、これが電力揚水に変わる。明治後期から上水道が敷設され、水は共同栓からブリキのバケツで台所まで運ばれる。その後、家々に個別に給水されるようになると、流し台や浴室、洗面所に蛇口が設けられ、トイレも水洗便所に変化していく。

このような、水と暮らしの変遷については、吉井川の漁業、筏流し、水車の盛衰を綴った二本正視編「津山・すまい風土記三」（ホープ市民会議1993）、加茂川、肱川、小田川流域で暮らす昭和を生きた抜いた人が語った愛媛県生涯学習センター編・発行「河川流域の生活文化」（1995）、沖縄ではガー（井戸）の水からダム建設によつて水道が使用されるようになった変化を捉えた沖縄の水研究会編・発行「水のいまむかし写真集」（1992）にもみられる。また、大島忠剛著「写真集手押しポンプ探訪録」（信山社2006）には、東京都区部をはじめまだ現存する全国の手押しポンプを撮影した記録でノスタルジアを覚える。

日常の水利用について、健康と水、排水の行方、働く水等の知識を与える建築設備技術協会編「小事典暮らしの水」（講談社200

2）、水の番人（環境衛生監視員）が都市の水まわりの安全対策を現場から語る中臣昌広著「水の安心生活術」（集英社2004）もある。

最近では住宅や公共施設建物に雨水を利用した装置が設置され、水の有効利用が進んでおり、日本建築学会編「雨の建築術」（北斗出版2005）にその事例が紹介されている。水害で悩まされた千葉県市川市は新住宅を建築する場合は雨水利用の設置を条例化している。雨水利用は、治水と利水の役割を持つていくからである。

以上、いくつかの書を挙げて、水と暮らしの変遷を辿ってきた。地球温暖化によつて、また水の暮らしも変化するであろう。日本は木と竹と紙の文化といわれてきたが、今ではコンクリートや鋼鉄の構造物に覆われ、乾燥した文化を創り出している。自然環境の復元が叫ばれている中で、森林、竹林の荒廃を防ぐにも、木と竹製の水の道具をつくり、それを利用することも大切であろう。

（温暖化進む地球に水を打つ）

園田廣子



調査結果に触発されて

慣れというのは、恐ろしい。先入観や既成概念から「当たり前」と思っ取上げなかったり、排除してしまうからだ。

13年間続けてきた「水にかかわる生活意識調査」を振り返る過程で、私たちも慣れや思いこみに陥っていたことに気づいた。例えば水道水への評価などはその最たる例で、「水道水はおいしくない」という評価は減った」という調査結果から現状を把握しながらも、自分たちが利き水をした際、つい「思いこみ」に影響されてしまった。

また、調査結果として挙がってきた「川で遊ぶ人が少なくなっただ」という回答の理由には、「危ないから」、「水が汚いから」などが思い浮かぶが、その理由自体「刷り込まれた常識」かもしれない。常に疑問を持ち、さらに掘り下げていくことも必要だと、認識を新たにした。

今号では、「水にかかわる生活意識調査」の結果13年分を携え、

個々の項目に関連した研究や活動を行なっている方々を訪ねてみた。それぞれ専門の立場から読み解いていただいたお話から、私たちは大いに刺激されたのである。

例えば「水が希少で過酷な環境にあるアラブでは、自然は愛でる対象ではない」、「水道の塩素臭も海外のある地域によっては、むしろ安心の指標となる」という話などは、私たちが持つ日頃の常識を問い直す内容であった。

「アメリカ留学中、全自動冷暖房装置付きの郊外住宅に住み、外出のすべてに車を使うようになったら、いつの間にかそのライフスタイルが快適に思えてしまった」という体験談には考えさせられた。エコライフを志向しながら、一方では便利な生活に慣れすぎて、なかなか後戻りできなくなってしまう事柄は、日本の暮らしの中にもあるのではないだろうか。

調査結果を表面的に読むだけでなく、「本音は10点をつけたいが、8点でも出しゃばりすぎと思われそうなので7点しかつけない」、「里川を代表する川のうちの1位は全国共通のイメージで選ば

れた川。回答者が2位に挙げた川こそ注目するポイント」というように、調査対象者の心理に迫る読み方も教えられた。

調査結果も単なる数字の羅列ではなく、その奥にあるものが伝わりにくい。専門家に調査結果を解釈していただいたことで、私たちはさまざまな触発を受けた。

専門家にとっても、従来の研究テーマとは少し違った角度から質問を寄せられたことで、何らかの触発効果が生まれたかもしれない。

思い込みを戒める

生活者の「水にかかわる意識」を高め、新しい「人と水とのつきあい方」を提案して豊かな暮らしの創造に貢献したい。私たちはそう考えて当センターを設立し、機関誌やホームページ、フォーラム開催などの活動を続けてきた。「水にかかわる生活意識調査」は、その活動をより充実するための手がかりとして始めたものだが、13年間の推移をまとめたことで、私たち自身「思いこみ」や「慣れ」を問い直し、「触発力」の大切さ

に気づかされた。

「触発力」は、自分の考えの範囲を超えたときほど、大きな効果を発揮する。だからこそ、「当たり前」でない見方や立場に踏み込みつつ、魅力的な切り口を紹介していきたい。そのために、先入観や既成概念にとらわれず、思考を柔軟に、視点を多角的なものにしていかなければ、と改めて思う。

触発の連鎖反応

私たちが触発力の大切さに気づく以前に、調査に答えてくれた方々は、もうそれに気づいていたかもしれない。例えば普段何気なく使っている水について問われたとき、「水が大事なものは当たり前」「節水はいいことだ」と無条件に感じていた気持ちを見つめ直し、水と生活の深いかかわりを再認識した人もいるのではないだろうか。節水というついでエコや節約と結びつけて考えがちだが、「水は力を得るためのもの」という意識が日本人の心の根底にあつて「水を大切にしよう」という気持ちが引き起こされる、と知ったことも

私たちが触発してくれた。調査結果は、日本人が長年にわたって育んできた大切なものを再認識することにもつながっている。

ホームページ上でも公開している調査結果は、マスコミにもさまざまな用途や切り口で紹介されるようになった。これもまた触発であり、切り口が面白ければ、それに触れた人々にも触発はさらに波及する。「これは面白い」と思っ活動していると、人の輪は広がっていくようだ。

「山に木を何本植えれば水質がどれくらいきれいになる、というのではなく、『人間の意識をどう変えるか』ということが目標だった」と「牡蠣の森を慕う会」の山重篤さんが言うように、意識が変われば環境も変わる。今年20年目を迎えるこの会の活動も、義務感や倫理観より、「ご本人たちが「楽しんでる」様子が大きな触発力を持ち、ここまで広がってきたに違いない。

私たちも楽しみながら感覚を研ぎ澄ませ、より多くの人が水への関心を高めてくれるような触発力を生み出していききたい。



■水の文化28号予告

特集「小水力」(仮)

電力買い取り料金の安さから、
小規模発電の普及がなかなか進みません。
小規模自然エネルギーというとき、
太陽光と風力ばかりが話題に上り、
水力が忘れられているような気がします。
持続可能な生活を維持する手段の一つとして、
小水力に着目します。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。
ユニークな水の文化学習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。
すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

編集後記

◆人の生活、暮らしと水とのかかわりは、深く大きい。それにかかわる意識に迫るのは容易ではないが、13年も続けると、結果として見えてくるものがある。水をもっと身近に感じてほしい、水を大切に思う心につながればと思う。(新)

◆「水にかかわる生活意識調査」へは毎年、様々な問い合わせがくる。毎年定番の質問もあれば、まったく予想していなかった質問もあり、問い合わせ対応はとても面白い。これからもたくさん質問・感想をお寄せいただきたい。(百)

◆長年実施しているものの総括や振り返りや見直しは、5年とか10年とか、区切りのよい年に行なうのが一般的だ。しかし、13年という中途半端な年数だったが、敢えて振り返ってよかったと思う。来年の調査票づくりや分析にぜひ活かしたい。(ゆ)

◆最近、水ビジネス投資ファンド募集広告を新聞で目にするようになった。こんなこと10年前には考えられなかった。社会的に受容されてきた水利用の論理と倫理は、グローバルゼーションに太刀打ちできるのだろうか(中)

◆唱歌「春の小川」に描かれているのは、私の故郷・東京渋谷区の情景である。もともと私が学校に上がる頃には、春の小川の代わりにネオンの川が流れていた。昔の景色を取り戻す方法はないだろうかネオンの川の中で考えてみよう。(恵)

◆温暖化ストップのために払う金額の平均は約2000円だったが、個人的にはもっと払っていいと思っっている。自分のお金が地球規模で役立つというものが直接実感できたら、相当な満足感を得られるだろうと思う。(力)

◆礼節という言葉は道徳臭くて毛嫌いしていたのだが、対人間ではなく、自然に対して礼節を持つことには納得がいく。有り難いなあ、と思う気持ちの高まりが、礼節に代わる新しい価値観を生み出す原動力になる。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第27号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

禁無断転載複写

発行日 2007年(平成19年)10月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

編集制作 秋山道雄 新美敏之 百瀬友美 小林夕夏 辻美代子
中庭光彦 緒方大輔 浅野恵子 賀川一枝 中野公力 賀川督明

発行 ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中塾ビル9F
株式会社ミツカングループ本社 社会・文化活動センター内
Tel. 03(3555)2607 Fax. 03(3297)8578

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 事務局

〒104-0043 東京都中央区湊1-13-2 アリス・マナーガーデン11F
Tel. 03(3552)7504 Fax. 03(3552)7506



ミツカン水の文化センター

表紙：水切り。最後に石を投げたのはいつだったのだろうか。秘訣は石の選択にある。平べったくて丸い石がよい。
水面ぎりぎりのアンダースローは、最後にスナップを利かせてシュート回転をつけてやる。
水辺に丸石があって、気兼ねなく「水切り」を楽しめるところが少なくなった。

裏表紙上：夕暮れのまち歩き、夜の11時を回ったところ。北欧の夏は、長い夕暮れを楽しむ人で華やきを醸し出す。
北のほうでは朝焼けとの境がない地方もある。

裏表紙下左：物事は、複雑な事柄のかかわり合いの中に存在する。丁寧にはどいていかないと余計に絡んでしまうことは、よくあることだ。「舳（もやい）結び」という輪が縮まらない結び方でクリートに固定するのは、アンカーロープが絡まないで簡単に外せるようにする工夫。後から舳う船は、クリートの一番下に舳うのが「作法」である。

裏表紙下中：気仙沼湾に注ぎ込む大川の源流近く、ひこばえの森の山麓に水神様が祀られていた。
つい4年前にリニューアルされたという。海からのラブレターが、水を敬う心を触発したようだ。

裏表紙下右：流れゆく水の周辺では、さまざまな人間模様がくり広げられている。
誰かがその流れにフォーカスを当てると、波紋が広がる。

